鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月 續編 下

913.56
Ta624t
t

阿部家蔵書

国立国会図書館蔵書

鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月續編卷之四

東都 曲亭主人編次

第三十八回

一夜の夫婦永訖を守る
鏡中の幻術骨肉を割

安願夫人は中城に閉籠られて。嬬紀月日をあかし暮しぬる程に隙ゆく駒は足疾速
又五七年の春秋を過しつ。かゝりし後は中婦君利勇等も憚るとあろおーとや思ひけん姦計を逞くして逼り苦しめんともせず王女は元来王位に望おはしまさねば。おかあかに後やをくて只閑雅に一生涯を。おくらんとのみ願ひぬるあるべし。定に才色の備なきいへばさらおり孝心いとふかけまべよや。ふたゝび三遍寃枉に罹りて薄氷を踏よりもおお危きを脫れぬへり。これ併手國鼎が誠忠もて輔進らするにありそれさへ蠟忌の中にこゝろをおけば親くは參らざりしに。ある夜更闌て。潛やかに呼門を誰と問はーぬるに毛國鼎なりとまうせば王女も夫人も。いとおつゝしくおぼせーかねば。やがて呼び入れて對面をぬるに毛國鼎は出居のかたに跪さて。つち〳〵と見入れたるに。唐薦おども無下に斷離て煤びたる几帳に申の刻にはや過ぬらんとおぼーき。緋の袴を掛られ

国立国会図書館
25.8.10
210058

たり拂ひもあへぬ紙窓を豆が家がほかる蜘蛛の網ゑ昨夜の雨の降そゞ充て玉簾とも見ゆめれど。綱代天井ゐ雨漏の痕ゑ汚ゑて月の暈といふものめきたり貴充事世子ゑて おゐせしも過世あしくてかくゐ世ゑ捐られぬゑ痛おさよと思ふゑ涙先だちてまうさん事も口ぐもりぬ當下王女ゐ真鶴して茶を賜らせ按司(毛國鼎をいふ)小夜深て參れるゐ事ありてかと問ゐへゞ毛國鼎小膝をそゝめさんゐ晝ゐ人めのいぶせくて明白ゑゐ參りも得ぞ竊ゑ愚意を聞えあげゞやとて驚ゝ奉る事別義ゑあらぞ顧夫人も聞食ゐるべし命婦真鶴ゐ忠臣司馬公(順徳)の女兒ゑて夫人の爲ゑゐ異母女弟正ゝく王女の外戚たり心ざまの信やかゐるゐ父ゑゑ母ゑも劣りゐゐぞ年来の給事誰かよくおれに及ん。その忠その孝嘆賞するゑ餘あり。おかれども。もゝその志を合して外ゑ助るものおくゞよろづ便おくゐゝ。よりて某嫌妬ゝて婚姻を締ゝ事あらんと充の翼とをべき壯佼を擇得たり。されゞとて。おの婚縁公たちてゐ佞人忽地疑ひを發ゝて王女のおん爲ゑよろゝからぞ彼ゐ夫是ゐ妻と只一夜さの契を結びて百年の苦樂を共ゑせんおと忠臣烈女おらでゐいたゑがたゝ自の爲おらぬ妹と夫を推辭ゞと思ふ壻がゐゐ近曽鄕より舉られたる里之子の松壽と呼るゝものゑていゐ彼ゐこの中城の屬村ある姑場

松壽ハ今琉球國ニ住スルトテ中山傳信録ニ見ヘタリ邦元ノ事ハ色本書ニ作リ安珍ノ事ハ成道ニ似タリ

の里人陶氏が一子おり少さより文武の道ゑ志深く常ゑ首理ゑ交加して物學をるゑ。年十五ゑ秋浦添ゑ山徑ゑて驟雨を避んとて獵夫の家ゑ立よりばからずもおうねき女の妻蛇とおりたるを只一刀ゑ滅ゝて。その名三省に聞えたり父母ゐ往年身まうりて。この兩三年仕宦ゑ他事おく忠勤を勵り今茲ゐ廿歳をゞ超ゐけん。このもの原来某が武藝の弟子なるをもて聚て機密を說知らゝ語ひ課ていへゞ彼聞者とおりて。利勇等ゑ阿諛ひ惡人ゞらが計較を竊ゑ告おらしゐおり。かく悪ゝき壯佼おれゞ忠義ゑ爲ゑ締ぶ縁ゝを。いかで推辭ゐべき。松壽外ゑありて賊臣を防ぎ真鶴内ゑありて給事せゞ中婦君ふたゝび王女御母子を害せんと謀りぬふともこれを避るゑ便あり。この事いかゑゐゐん。と信やかゑ密語まうせゞ寧王女ゐきらおり顧夫人歎びて真鶴ゐ。さらゐが妹おれども。母ゑゐ義理あり。おかるゑ按司堪均ゝて良縁を結ゝぬふおそ。およおき妹が僥倖おまと真鶴ゐ。さも思ゐずや。といひかゑて見かへりぬへゞ真鶴ゐ顔うち赧め。いかでかゐさる事侍らん人ゑ婦ゐ世ゑあるものゝうべゑこそ。と推辭まうをを夫人國鼎かゐる〳〵ゑ說諭ゝ何事も王女のおん爲おまゞ。まげて承引ゐへかし。と叮寧にもゝめて領諾さゝ。さて毛國鼎ゐ退出ゝが詰旦首里ゑ到りて。松壽ゑ縁由を聞えおらゝ婚縁既ゑ整ひゝかゞ

黄道吉日をえらみ。潛やかに松壽を中城なる世子殿に誘引て王女夫人に見參さし。この夜真鶴と婚姻をとり行ひ酒を酌壽を述るほどに夫婦ハ一時の夢をだに結びあへぬしてその曉に立ヒかれ。遂にふたゝびよりも添ず。彼天上の牽牛織女も歲に一度のあふせハあれど。これハ一夜の添臥があふを別のはじめにて面をあハせるよしなけれど。陶松壽も真鶴も。綽みお忠義の爲とおもへバ。胡越のごとくに遠離つ恩愛いよゝ濃やかにて送ひ思ひ恋るゝ隙おく十年あまりを經る程に。ある人絶てなかりけり。葉下其生再說中婦君ハ曚雲が妖言に惑ハされて。子を生む事のありもやせるとて。はじめ利勇と姦通しなほ飽ずして美少年を。夥後宮に養ひ。世の譏を省ずその爲体飛燕三宮を亂せるあらずハ。光明千人の垢を掻に似たり。のく情慾ハ恣にもれどよる年の涙バかり。堰とゞむるに術なく十あまり七年の春の楢ハかハらねど。姿の花ハ彌衰へて。秋やふる根に竹のよそぢさへ。やや過て五十に近くおそれけれど。終に孕る氣色おし。ある日尚寧王ハ。その性陰弱おるにいたく老ぬれバ。民弘訴を聞くに倦て國政を曚雲利勇にうち任し。放鷹遊山を事とするに。今茲ハいよゝ身の衰をれがえて。久後の変心もとおくやありけん。有一日中婦君に對ひて。ヒが夫婦過世あーくて男兒を生ぜヒが齡既に六十にあ

ぬるに。はやく世嗣を定めよと三司官等が諫るもうべおり。きれバとて別に子もあらぬ王女ハ珠を失ひたるを懲さん爲に中城へ閉籠てより。歩の年月を經たり。彼も三十あまりにやおらんぞらん。今ハ免すべき時おるかー。往に毛國鼎がまうせーよしも理あれバ王女に位を傳んとおもふまおそまづ聞えあらぬをるおれと宣ハすれバ中婦君眉を顰め。王女の世に出ぬハんハ年来希ひ侍るから。いと喜しく侍るかしさてもヒらたハ。去歲の冬より身の重きをおゞえ侍るを典藥正おとゝ全く懷胎おらんとハ定め得ぜヒかき時だに産ぬ子ぞ。さるとありとハ。ヒが身も思ひ侍らねど當初曚雲國師ヒらハを相して王子誕生あるべーどまうし。死とかく國師に問定め大臣にも聞えあらーねへかー。と寶ーやかに回答しかバ王点頭て。次の日曚雲を招死寄し。利勇等を召集合て。世嗣の事を議をるに。聚て謀ーあハせし事おれバ中婦君潛と聞をる程に曚雲はやくその意を得て。席をそゝめてまうすやう。殿下おん仁慈ふかくして寧王女の幸をおぼー忘れず。舊のとく世子とーぬハんハ理に於てあかるべけ是ど國の爲にハ甚わろー故いかにとおれバ中婦君有身ぬひて。臨月既に近づきぬへり。曚雲年来の祈念空ーからず。胎内の御子權者の後身にてまーます故に。御氣色生平にかハりぬハず。おゝをもて人その懷胎ーぬ

ふをあるとなり此度誕生の御子は舜ふべくもあらぬ王子まして在すまゝ暫しが程を待しぬゝて只今世嗣を定めぬゝ後悔その詮なからん歟加旃王女を立て世子とし給ふときゝ天孫氏は正統ゝ。あの時まで絶ぬひおん極ていひがたき事まゝあれど彼寧王女ゝ殿下の御子まあらぬ實ゝ毛國鼎が花生おり廉夫人宮中へ召れざる以前より從弟どちおれば毛國鼎と疎からぬ是彼遂まて密通し懷胎していく程もおく殿下まて召れて寵恩重く御子を産りと世に誇り縱天をゞ欺くともこの曚雲を欺得んやかゝまゞあば〳〵。毛國鼎が面を把して諫こしらへ王女の爲まて非を覆ひしゝおのれが子おれば。ゆかにもして遠國をあらせんとゝその奸計一朝の事まあらねと殿下ゝ一点曉ぬゝず王女を世嗣としぬふから君真物の國神怒り先廟受ぬゝぬして災を降し珠を奪ひて。おれを妨ぬひしおり貧道ゝゞめより。よく猜ぬるといへども明白まゝゆふよしおくて深くおゝろに秘たれど今日もし一言を惜みて告奉らぬゝほと〳〵大事を悞べし。その餘の事ゝ。まづからおもひあゝしぬへかし。と實あやかに啓れゞ中婦君えうち驚きたるおもゝちして。利勇等と面をあゝしこゝ不思議おる事を聞くものかお寧王女を毛國鼎が花子まてあゞけるとゝ。神おらぬして誰かゝおらん廉夫人の賢がほおる毛國鼎が忠臣めかせる千仞の海ゝ測るとも量がたゝ世の中の人れ心乃底おりとて舌を振て嘆嘆しは當下利勇ゝ膝とまゝめて曚雲に對ひ國師の明察と疑ふまゝゝねど王女母子推籠られぬひて後ゝ毛國鼎も世の議論を憚りてゞ中城殿へ參らぬ彼もし王女と世ふ立んと計較ものおらゞ區々とし〻十年あまり。はゞ二昔ふ近き月日をいたづらふ過せしゝいかふゞゞその遲し充奸智どもて。おどて謀叛を興ざりけるいとおぼつかおる事おり。いゝせもあへぬ曚雲儼然と形とあらさめ。こゝ南風原の親方(利勇といふ)まも覺ぬ毛國鼎が謀反稍久しといへどもいまゞ氣色まゝ顯さゞるゝゝこれと御邊と執權たるまゝ憚りてなり。亦彼ゞ不義の宿望全く果し得ずといへども。廉夫人宮中と出されて後ゝ。毛國鼎日夜潛ゆきて淫樂まゝ耽るをもて遂まゝ懈りて事を急ませぬ君王既まゝ老ぬへゞ。世と辭しぬふと待ものなり。おかるを往まゝゝ彼ともて王女の傅とし後亦王女と廉夫人を國鼎まゝ預ぬひし事これ盜人まゝ糧と齎がごとし彼が世と憚りて中城殿へ參らぬといふゝ。人まゝ疑れゞとてなるを實事とおもふゝ淺はかおらんとあざゝ笑て覬示せゞ利勇ゝゝよゝ呆きたるおもゝちし按司黃帽官まゝ至るまて驚充惑ひていふ所とおらぬ尚寧王ゝ。綽の趣を聞て呆るゝ支半晌ゞのり。手をもて額まゝ加えつゝ只管まゝ嘆息し廉夫人毛國鼎

が隱慝もし國師のいふごとくならば。その罪五逆に當るとても王女が國鼎が子なりとは何狀もて證據とせん。罪の疑しきは刑と加るによしなからむやと宣へば曚雲答て殿下慈悲の制度ともて。人をかるゝ〳〵しく罪し給はゞ願くは一面の鏡と貸給へ。彼等が姦淫の爲体とうつし〳〵おん疑を散し奉らんとまうすに。王熙頭て。聽く里之子に仰て大きやかなる鏡をとり來らしこれを中城の方へさし向て殿の畫柱に掛さし給へば。曚雲やをら身を起し〳〵鏡のほとり歩みよりつゝまうすやう。貧道目今千里眼の法術ともて國鼎等が隱慝を照らしはべし是はこれ閻王宮裡にありといふ睜玻璃の鏡に等し。晴と定めて觀せかしとまうし果て。鏡に對ひ加持する事三遍君臣一齊あれ狀見るに。且〳〵鏡の面赫奕と鮮明なる事明月の昇るがごとく世子廢殿の後堂隈なくうつる間毎々もむかしおがらに荒まさる時は九月の上浣にて南海殊に暖く木芙蓉華さて容顏悵然といふ渡島枝に囀る聲愛さし。梅花はじめて匂やかに桂樹に雜る鐵樹花も蒼て冬をまゐ翅は綠く眉白きと。麻石求子と人の呼子鳥。石求子。莫讀史の諸鳥渡る秋の庭姿種下かさへ求食ては何處へ落る紙鳶みおの月乃景物おり簷の松風莫の水の音おふばかり廢館は訪ふ人けおさ鳳蕉舍に毛國鼎は真鶴ふ酌を執らし顧夫人と酒もり遊び盃もおばゝ〳〵めぐりて。いたく醉ぬと見えたるに顧夫人は。蛇味線をとりて撫持し。

いと柳こゝろくに。あらおやゞのよてはゐものかぜにてりよか。

（琉球うたおるよし祖徠箱の聽使記に（心に苦のある夫人以下解しおたし一説にうかれめおどのふうたおる見はたりとて琉球談ふのせられたり（やむといふえ（べーといへりおからむ夫人にはふげおからん歟）

と聲いと妙に唱ひにければ。國鼎は顧夫人の膝を枕に假寢しつゝその動靜云爲迅尺の中に見るとくおれば。尚寧王は瞬もせぞうち覩つゝ猖紀事限りおく忽地鼻息荒くおりて。且呆れ且怒り。これにもあらで俯に高坐より滾落腰をうたして。起も得ざるを利勇等慌忙て扶起にに王はおゐ眼口をひとつによせ流るゝ涎を拭ひゞやうやくに左右狀見かへり大息吻ていへりけるは。われ暗愚にして賊婦逆臣に忻らに。三十年來寧王女を這奴們が花生おりとしらむ位をさへ傳んと思ひゐることを悔しけに利勇はいそき軍兵伐將て中城へ走向ひ顧夫人毛國鼎はいふもさらおり寧王女が首を刻て佶と見せよといきまき紀高く仰るに智あるものは曚雲が幻術もて。あらぬ事を銃にうつして君を惑しまゐらせるかと疑ひおから威權に怕れて明白には論し得ず衆皆頓首してまうすやう。毛國鼎只一人を討んとて。夥の軍兵をさし向られんは。路次の煩ひたるべし只穩便の制度をもてこれを召よし。綷の虛實をたづね問しねへかしと諫しかば王諾ひて。去からば

210058

査國吉が事中山傳信錄卷之二豐陽條の條下に見えたり

孰を遣して毛國鼎を召さゝべ紀。と問ふ利勇がまうをやう里之子陶松壽ハ心ざま武して物ふ熟たる壯佼あり彼毛國鼎が武藝の弟子おきどもその不義を憎みてや久しくこれを跡みて常ふ小臣が家に来訪ものを又挺牌金査國吉ハ國鼎が妻新垣が從弟あり此ものに故ありてふかく國鼎を恨るよし松壽潛ふ小臣に告ゝる事あり今この兩人ふ計略を授て中城へ遣しぬハ毛國鼎疑をして參るへしと啓すれ尚寧王さらべ松壽査國吉ふ密詔を傳よと仰るに利勇ハ聽て件の兩人を閑室ふ招紀よして仰の趣を聞ゆるらしさていふやう毛國鼎中城を出たらば御邊等ハ事ふ托て途より引かへし松壽ハ世子殿ふ走ゆきて王女顧夫人を刺殺し首を引提て歸り来よ又査國吉ハ直ふ毛國鼎が家に推よせて這奴が妻新垣とその子どもを搦捕へし加勢の兵士ハ抄徑より陸續ふ遣そへさふ。一世の忠節おの時ふありとえ〳〵うち立ひへ。といそがせべ松壽査國吉一護ふも及ぜ領掌して從者ハいと寠し馬上おからふ正門より走り出て二騎轡をおし並べつゝ只管ふ嘆息し既ふ從者の後れたるを見かへりて松壽竊やかふ査國吉を呼びとゞめ牌金（牌金ハ査國吉が官名おり）何とか思ふ君王久しく曚雲が幻術ふ惑され且中婦岩淫にして佞人時を得たり三綱既ふ亂まて王女を殺し忠臣を害せんとを國の滅ん叉且夕ふあり吾儕官卑く祿微ふしてこれを救ひ得ぜ却て利勇ふ役せられて不狂人も走るに似たり豈嘆くべ紀事おらぜやと密語べ査國吉答て御邊とこれと豫て志をあハし曚雲利勇ふ佞媚さるハかゝる事のあらんときふはやく毛按司（國鼎をいふ）に告んが爲おり直ふ緣由を彼人ふ告おらして諸ともふ世子殿ふ搖籠討手を引うけ潔く王女顧夫人ふおん目前ふて陣没すべく思ふおりといと勇しく回答しかべ松壽聞て。さもこそと打點頭つゝおべし從者を待あハし。ふたゝび馬の足搔を早め中城を望てはせ去ぬ。

第三十九回

浦添山ふ國鼎使者ふ逢ふ　中山府ふ利勇忠臣を殺を

毛國鼎ハ。いまだ利勇等が計較をあらぜ君王ぬゝゝび王女を世子ふ立んとて曚雲利勇們の執權を集合ゐふよし今朝しも密書をもて陶松壽が告たりしかべ。おゝろ歡びて聽て真鶴して緣由を王女顧夫人ふ告進らせ綽の虛實をあらん爲ふ從者兩三人を將て首里へとて參りにけるが。はからぜも首里と中城との間おる浦添山の麓にて兩人の使者ふ逢ひぬ當下松壽査國吉ハ。えるかふ毛國鼎が来れるを見て齊をふり立手按司吾儕おん使を承りつ君王の仰あり。と呼れべ國鼎忙しく馬より飛下り道次ふ立て待

ほどゝ兩使いほとり近く騎つけて鞍坪に威儀あい繕ひ君王の仰あり此度王女麗夫人を召かへ一舊社ごとく王女を世子として位を傳へゐいんとおりこれよりて大臣諸按司を召集合て事を議しゐふとぞ。とく〳〵參てひへ。と相述きべ毛國鼎謹でうゐゐいり召るべういあらざりしが只今首里へ參れるゝこゝまておん使に行あひぬるこそ幸あれ。詩ゐへとゆふ。その氣色滿面ゝ笑を含て他念なく見ひしかべ松壽査國吉いいと苦々しくて利勇が計較をあらせまほしくい思ひあがら從者に聞れん事を憚て明白ゝいえいいずいお吾儕い是より直ゝ中城殿へ參りて王女麗夫人ゝ傳進らまる仰あれば。もろともゝいい歸りがたしといふ。國鼎聞てあからべ許しゐへ。と回答て馬ゝ閃りとうち跨ゝ東西ゝ別れつゝ間五六町ゆ行隔りし北松壽査國吉もろともゝ鞭を鳴らして追蹤來つ毛按司。あべし歸りゐへ。おほいふべ行事あり。と呼びかくれば國鼎轡を引戻して慕地に馳寄するゝ是彼の從者い既ゝ遥ゝ徙れたり。この隙ゝ兩人の壯佼い曚雲が鏡中の幻術中婦君利勇が計較おちおく國鼎ゝさゝやき又いふやう綷既ゝかくの如くおるに按司首里ゝ赴行ゐいゞ忽地首を喪るべし。はやく引かへして世子殿ゝ楯籠り忠義の士を招行集めて曚雲利勇をうち滅し王女を世ゝ立ゐへかし吾儕外ゝありて反

間の計を行いゞ逆賊を滅さん事踵をめぐらすべからを猶豫おゐふ変かい。といと信やかゝいそがせば毛國鼎頭をうち掉御邊等從者ゝ聞れゞとてふたゝびゝれを呼び戻し火急の危難を告ゐふ事おほ日月地ゝ墜を國神も人社まとを憐ゐふか。とおぞしおかいあれ罪おれよしをいひとかん爲ゝもせよ世子殿ゝ楯籠討手を引うけて防ぎ戰いゞ王女い子として父と拠み。ゝれい臣として君を変ぐおりさるときい罪おきをいひとかんとて却叛逆の罪人とおりおん常言ゝ忠臣の犬とおるとも亂離の人とおなりそ。といへり。けふい是ゝが死すべれ日おり御邊たちいよゝ忠義の志を移さをべ潛ゝ王女麗夫人を落し進らせ。もし暇あらべ。ゝが妻子ゝも綷の趣を告おらして禍を避さしゐへ冢子鶴い。十四歳次男亀い。十二歳おれべ西東をもをやおるべし。父が孤忠社苦しきを思ひやり寧王女のおん爲ゝい同肥命を捨よかし。と傳へゐひね。と回答して歸る氣色いおかりけり活處ゝ從者等東西より喘々走り來て間近くなりしかい松壽査國吉いふたゝび諫る事を得ず毛國鼎い遂ゝ馬社平首を東へ引む本首里を投て馳去を査國吉つくゞと目送りて陶松壽ゝいふやう毛按司い寔ゝ蓋世の忠臣たり。ゝれ彼人の通家たれべ年來の恩義いと重し命を捨てその子ども鶴亀等を救ふべし。御邊いはやく中城殿

へ參りて王女と顧夫人を落し進らせ便宜の地に潛せ奉れかしと密語べ松壽微笑て御邊に千れに云かるべし。されに血氣の勇にはやりてかる〳〵しく命を隕んとに思にず救ふべくに救ひ進らせ救ひがたくにさて已おん薪を抱て火を救ひ湯をもて沸を留るとも勞するのみにて功あらんや狼狽おべおき後までも胡慮おるべしといふを查國吉聞もあへず大に怒り汝にはや命をしくて言を兩端に寄せるとおほしかくに王女のうゑも又心もとおしさまべとて。己が身ひとつにて彼を助これを救ん事難義おり所詮汝と此處にて。うち果さんにに。といきまきて。かけも寄をべき氣色おるを松壽に些も驚ずして莞爾とし牌金おどて。かくに思慮おき御邊に勇をもて恩に荅んとすわれに智をもて忠を竭すものおり。えし機に臨こ愛に應ぜるにあらぜべ曖雲利勇を欺課て王女を救ひ奉りがたし。機密においに議をべからぜ御邊とわれと擊果して何の益ありや。と說諭べ查國吉怒地に面を和らげ。おかおり〳〵。と應をる間に從者們走着にけれべ迭に道をいそがして美里と浦添の間なる捷徑に馬をはゝめつゝ飛ぶが似に走らをきべ從者們に又後れたり。不題按司毛國鼎に重き忠義に輕き命も終に脫れぬ時運か。と思へべそれもおか〳〵。きから急ぐ死出の鳥八千八聲說むとて。とき竭されぬ濡衣のゆともに苦しき死世の中に亂れてそおに忠臣を不忠とも不義ともいへ靈にこの土にとゞまりて。惡人們をうち滅し王女を世に立奉らめ。とこゝろ一ッに唐鞍のうづもるゝ名に惜みあへぜ曇らぬ胸や月毛の駒に手綱短くかいくりて中山府へ參りつゝ正門に馬乘放ち參り熟たる龍宮城の正殿へ。とすゝこ入るを待設たる夥の篝燈之帷幕を撥て跳出り鎗閃して左右より勝ぐさと刺徹せべ國鼎その鞘を握りとゞめて。

つぼてある花の露のみまやたごと。つぼみてある花のつゆの身といふとおり

そのつゆをおびきにるたるごとし

と辭世の一首を詠ぐも果ぜ又一人後方より劒を拔て走蒐り忽地首をうち落しぬ嗚呼痛しきかお毛國鼎その忠その義古人に恥ず勇にして且武略あり顏を犯して君を諫め。真言して佞人を極ぎ王女顧夫人社危窮を救ふと數回國の安危存亡もて己が任とおつれども暗君怒に用ひ得ぜ談言おべ〳〵行れて忽地にあれ狀誅しつされべ天日これが爲に闇く鬼神あれが爲に泣。つらねたる歌に琉球語おり。(聘記使に注せられたり)つべてある花の露の身まやたごとに含る花の露を帶さるどき身おり。といふこけなべやたてろそもなほれかおとに消おべその彩色もおれあらんや人の命もおかおり。と無常を觀ずるこゝろ言葉の和歌の句調によく稱て三十一字とおりぬるこそ殊勝おれかく

は筑登之等毛國鼎が首をとつて献れば。利勇おれを銀の皿に装て群臣にさゝ〜示し逆臣國鼎が隠謀悉く露顕して既に誅伏したをはんぬ。王女簾夫人真鶴等が討手には陶松壽けゐはり國鼎が妻と子どもらをば查國吉に仰て搦捕らしゐへば聖慮やうやくこゝに安し。おの〳〵祝し奉りはへと喚びかけてひとり〳〵にさゝ示せば三司百官駭然と驚怕れ逆賊立地に滅て邦家ます〳〵泰平あらん。公私の幸これにまさる事おしとぞ謂ひぬ。當下尚寧王は曙雲に對ひ國師嚮に中婦君に既に有身たりといひきいはの程に分娩るべき審に指示はへと仰せば曙雲おべしうち案じつゝ指を屈てまうすやう。中婦君の御産はやくはこの月の中にありよしや遅くとも四五十日は過べからず誕生の御子王子にてましますおれば来年はおん望足りてさぞ歡びおぼをらめと啓れば王斜おらを欣悦し。おからば今より母子平安の加持あるべしとて叮寧に宣はれば。曙雲又まうもやう。御平産のおん祈は仰を待ずして年来おれを修行せり只忽におがたきは王女簾夫人の討手おり陶松壽はかひ〳〵しき壮佼おりといへども彼のみにうち任しゐはんはおほ心もとおしはやく利勇に聘の筑登之をさゝ副らせ松壽を助けて王女を討しめゐへかしとまうをにぞ尚寧王げにもと点頭てそのよし右と仰れば利勇欣然として命を稟家にしも立かへらず歡會門のほとりにて鏢とつてきつくと投被馬上にて腹帯結びて暮地に走り出れば早雄の筑登之等紫巾官に後れじとて。おのおの械器を引提つゝ喘々ぞ追ひ續ぬ。

第四十回

涙を沃て松壽簾夫人狙擊
神を顯て白縫寧王女を祐

里之子陶松壽捉牌金查國吉は浦添山社麓にて毛國鼎を目送つ駿馬に白泡はまして中城へ馳ゆく程に從者は遥に後れ加勢の兵士はいまだ到らず。この隙に落をべし。と查國吉は毛國鼎が家へとて引返かは松壽は世子殿へ參りて後門のこおたにて馬より飛下つと門内に潜り入りて呼門もせず園の木立を遶りつゝ興ふかく參る程に寧王女簾夫人は桂華殿の孫廂に桂の花をうち瞻ておはせしが緯の爲体いと蕭々にて真鶴只一人侍りつ忽地に外面を見て。こはいかに。松壽が參りてはと啓る間に松壽はやがて欄の下に拜伏し言語はおくて坐に落涙おたりけるを簾夫人聞して。やうあらん。とおぼせしかは近く呼びのおして宣ふやう。めづらかおり陶松壽汝真鶴と婚姻せし夜只一たび見つるのみにて夥の年を過したまへ王女もこが身も面忘れしに年来戀しと思ふ良人

おれはこそ真鶴にはや足音まてもまちつらめ。さても連忙しく參れるとい
ろもとおゝ都にいかゝる分野まや君王にいよゝ安寧まに在を歟。と問ひぬ色べ松壽やう
やくまに頭を擡賊臣宮中まに充滿てせにはや季まにありてひ。はじめよりまうせべ如此
如此あり尾に箇樣々々こと。曚雲が鏡中まに奇怪の影をうつして王女に夫人と毛國鼎が
子おりといひしと松壽と査國吉まに仰て國鼎を召さしぬふまこれと浦添山の麓まて行
あひ利勇等が計較を告て直まに引かへしひへと諫しかど國鼎に死を決して首里へ參り
し事一五一十を聞おあげ査國吉に毛國鼎が妻と子どもを救んとてその家へ參りつ。
利勇にさらゝ妖術を逞する曚雲も吾儕を毛按司の間者とにおらず直まに中城殿へ
走せゆきて王女と夫人のおん首を擊奉れ捷徑より加勢の兵士を遣をべしといへり。
人まおられぬ間まに便宜の地へおん伴つかまつりおん詩ぬへといそがしまうせべ廉夫
人に王女真鶴と面をあはしおはいそもいかにとべかりまに呆れて去べしに應もに世ず。ば
ふり落る淚を拭ひ。ああいかおればまが身世まあるかひもおく天神地祇まに捨られ
て思ひもかおぬ濡衣に胸あひがたき中婦君の姤を角組む雅芦のあしといにまる濁江
のふかき伎倆と曉ぬにを王女に御子まあらゝとて殺せと仰る父王の御詔おそ意を得
ねとてもかくても脱きがた命おりせべまが身まづ刃まに過して紅木の赤き心を見せ
侍らん松壽真鶴いかまもして王女を助け進らせよとて齊を惜ず泣ぬふ理おきど理と
もいひかねて夫婦さま〳〵まに慰めまうせべ寧王女も双眼まに涙を含ま母社をいかで殺
すべき罪おきをいひとかんとて脱れも果ぬ身を驟さべ不孝のうへの不孝おり毛國鼎
が死を極めて首里へ參れる志たれもかくこそあるべけれ恨にあらゝ歎きぬふおこと
が身も覺期して侍りといひ勵しておかゝまに驟ぎぬふ氣色おけれべ松壽に真鶴まに駒
して齊をふり立怜悧におにしませどもさすがに婦女子の見識おり死をるを孝とおぼ
をまに賊臣を滅して民を救ふに王者の孝こ再社討手の大勢を向られおべいかまして
脱れぬにんいひがひおゝと諫つ賺しつ夫婦かひ〳〵しく扶掖て後門より出しまぬら
せんと議をるまこのおん形容まてに便おし。とせんかくせんとて。松壽且く尋思しつ。究
竟の変こそあれけふに姑場嶽おる山神祭まて姑場熱田當間伊集嶋袋社里人等さま
ざまの打扮して御所近くねり來つるを嚮まに參れると知まに見たり。これに箇樣々々まし
て廉夫人のおん供せん真鶴に如此々々まに打扮て寧王女の御供せよとく〳〵といそが
しつゝ大床まに挂られたる花籃をとりれろして廉夫人まに屑し奉れべ真鶴に殿内をる先

王廟の木獅子をうち被ぎて王女を後方に隠し入れ主從四人祭祀のねり物に打扮て巷口を投て狂ひ出づ抑琉球國に種々の舞曲俳優あり太平調長生苑芷蘭香天孫太平歌（あの歌天孫氏の作なりといひ傳ふ）桃花源揚香壽尊翁等の雅樂ゐ王宮おらでゐ興行する事を許さず。その餘笠舞あり花索舞あり又拘舞武舞球舞捍舞あり花索舞ゐ。小童三人頭に造花をいたゞき錦の半臂を被て花籃を肩にかゝて舞ゑ顧夫人をなゐちこれに打扮ぬ又球舞ゐ小童二人五色の袿を被て金の球の四方に鈴を著朱紐のいと長きをもちて左右に立て舞おがら二頭の木獅子我狂して種々の曲をおゞ事甚興あり王女真鶴この舞童に打扮ぬ又竿舞あり是田樂の類にや又扇曲掌節曲あり。こゝらゐ男舞白拍子の類おるべし以上間切毎の城隍祭にゐかゝらず興行するとおん。間話休題顧夫人ゐ王女真鶴に立ちかゝ陶松壽に扶掖れて姑場のかたへ落ぬゑ折から。野嵩のかたより軍兵二三百馳出て馬煙を蹴立さし関を咄と揚たりける松壽ゐこゝを見かへりて大に驚き討手の大軍はや近つきぬいそがしぬへ。とまうしもあへぬに又姑場の山間より野臥等發起ぬ。とおゞしく貝鉦の音轟然とりさてゐ四方に敵をうけつ。おゐいかにせんと躊躇てゆくもえゆかぬ歸るにもかへりうた羽の夜の鶴子を思ふ身ゐ

古巴梯は樹の名なり傳信錄に樹高サ二三ふ丈餘ゐ大ふ如柿の如ふ九月ふ實の青果のふ如しし熟して閩中にあり成土と名くとい へり

殊さらに顧夫人もこの景迹に今ゐかうと思ひさだめて古巴梯斯（漢名成土）の樹蔭に坐を占やよ松壽許手の軍兵彼此に充滿たれゞ寧王女のうへいと心もとおし汝に首を刎て討手の大將軍に見せよかしまからゞ一方の圍とけて王女ゐ虎口を脫きぬゐん。今さら躊躇とかゐと雪はつかしき項をさし伸掌をうち合してあゝを切き。といゐぬゞかりや花籃の花よりもろ死命おる松壽ゐ阿呀と應てもうつに擊れぞうつゝとも夢ともかぬ世の中に孝女節婦を守ぬふ君真物ゐ在ぬ歟命を限に防ぎ戰ひ敵に首をとらるゝともこれから夫人を擊奉り功名がをしてもて行んやとゞかりにてゐ寧王女もとにや擊れぬゑらん。とやせまゞかくやせまゞと。心一ッに定めかねて腸絞る油樹の梢眺て忙然たり顧夫人ゐ見かへりて。あおめゝ何とてかくゐ憶れたるに身にも物を思ゐせ王女をきへ擊せおゞ忠とやいゐん義とやせん綷後れてゐ悔ともかひおし。とくとく。といそがされ。と見きゞ近づく討手の軍兵脫ゐ得せゞ綱の魚主を喪ふ犬自物と身をおし果るも忠義ならゞ何厭ふべきと思ひかへして劒を閃りと拔翳せど四十のうへを六の花氷室の櫻老樹といまゞ見えおくにけらおくうつ人よりもうたるゝ人の胸苦しさいゐやましつ祭祀の舞子にまゞらひて後門より出たりしを今生の別れとゐ王

女もあろーめさやりけん後の歎きを思ひやる今宵ゝ物なおもゐーそとく〳〵うてといくそたび勵されていとゞおゐ癡るゝ眩定めなく刃を撲地ととり落ー尻居ゝ控と舞す胸ゐひつしと陣鉦を音ゝハ聞けど目ゝゐ見ぬ敵ゝおられゞと顧夫人ゐ落たる劒の い取て刀尖まとゝ袂百合うつぶきながら襟上へつらぬきて臥ゐへゞ松壽ゐなく〳〵れん首級をゐゐりて袿の袖を引断離り涙とともに押包て懸て樹蔭を走り出討手の屯ゝもてゆくに利勇ゐ床几ゝ尻をかけ夥の筵登之を左右ゝ立ー呼び入れて對面を當下松壽ゐ雄手ゝ顧夫人の首級を抱き恭おく跪た其嚮ゝ只一騎世子殿ゝ馳向ひて矢庭ゝ顧夫人を刺殺ーおん首級をゐゐりて立あがるその隙ゝ寧王女ゐ命婦真鶴を將て後門より脱去ゐへり。さるによつて彼此を索遶る折から南風原の親方(利勇をいふ)討手の大將として。みづから馳向ひゐゝよし聞えーかゞ綷の爲体を注進ー顧夫人のおん首級を實撿ゝ入れゞとやて參れり。おもふゝ王女ゐ。ゑや遠く落延ゐひゑん一方の國をと紀てその兵士を某ゝ預ゐゐゐゞ忽地ゝ追留いべしと信だちて夫人の首級をさー出せゞ。利勇ゐ筵登之して受とらー形の如く實撿ーてこれを首里へおくりのぼーさて松壽に對ていふやう既に顧夫人を討とゞといへどもいまゞ王女の首を見されゞかろ〳〵おくこの國をと紀がたー王女ゐ嚮ゝ祭祀のねり物ゝ打扮舞童等ゝうち雜りて間切を出たりと告るものあるゝよつてあのほとりおる惡少年ゝ謀を投もつはらその往方を穿鑿をこれゐ旦くこの處ゝ屯ーて查國吉が音耗を待おん汝ゐいよゝ油斷おく王女を追蒐て討留よと殘る隈おく指揮をるにぞ松壽ゐやがて辭ー別れ又姑場を投て走去ける。ゝゝりーゐどゝ寧王女ゐ真鶴ゝ扶掖れ錄舞ゝ打扮て主從木獅子をうち被ぎ里の總角ゝまゝらいつゝ姑場嶽の北のかた越來を投て落たまゝ浩處ゝ中城おる惡少年等錦の半臂ゝ花笠ーて。さら〳〵と推取巻獅子ゝよしある花の王その國王の子と偽る寧王女を摘捕れ賞錢ゐ乞ゝ任をゞー。と紫巾官(利勇)の仰をうゞ迹の祭ゝおらぬ間ゝと俄頃ゝゝ脚色し花索踊花の兄ゝちまつ魁て桿舞見せんゝ其獅子貸せ。と異口同音ゝ呼びかけて金箔ゐたる桿棒を振廻して打てかゝれゞ真鶴ゐ寧王女を後方ゝ圍ひ丁と受ていゞや狂ふ獅子ゝ壯丹の落花振籍放みを打て谷落し獅子の子おとし洞返し左右へ撲地と投除れゞ。おゐ朽とし。と號ひかゝつて八方より打ゐどに獅子の真額打裂れ半面あらゐを真鶴ゐ布搔捨て莞尓とー望ゐせねど被踊被らきてたゞ止んゞ。その國に處て恐くも王女を搦め奉らんとゐ獅子身中の蛆虫ども劒舞の手一奏見せん可惜命を失ひそ。

とあざみ笑て立たりける女とおもひ侮りし惡少年等大に怒りさてゑほざきにほざいたり。あれ打倒せと散動きて又閃を桿棒を劒を抜て切拂ひ右に當り左に拄縱横無碍に挑み戦ふ三人に手を屑し二人を矢庭に砍伏たりあかれども真鶴はその身鉄石にあらざれば肩を打し腕を折れ終に多勢に當りがたく株に跌き磯と輾べば衆皆得たり。と棒とり直し亂打に打程に憐むべし真鶴は肉破れ骨碎け今宵ぞ死出の山蔭を越来(處此名こ)の露と消ゆける寧王女はこの形勢に心死と極めて走りも逃ぜ真鶴が死を憐みて坐に涙さしぐみねよを一人つと跳かゝり頭髻を緬て引倒せば又一人の惡少年綽切てもなほ放さぜる直鶴が劒掻取て王女の胸前へ閃し吐嗟目今撃れぬひぬと見ロたる折ゝら一團の燐火空中より飛来つて王女の懐へ入ると齊しく王女は岸破と身を起し忽地劒を奪ひとつて二人が首を打落し倍とまらまへて立ぬふ。その形容はトめに似ず柳眉を蹴立る星眼光く百万騎の大軍をもおそれつべき氣色なれば殘るものども大きに駭き怪こは不審王女には物の憑て狂はするとおやゆるぞ。そも汝は鬼か狐か名告れ〳〵と問せも果ず王女は刃の血を押拭ひつゝこれを左手にとり直し南海孤島の賊民等に告ちらをる名はあらねども生殘るえのもあらば耳底にとゞめおきて後の世の口碑に傳よとは是は大日本清和天皇九代の後胤六條判官爲義の八男鎮西八郎源爲朝ぬしの嫡室肥後國人阿蘇四郎平忠國が女兒なりける白縫姫が亡魂なり。われ近曽夫とともに渡海の船中風濤の難によつて身を海底に投といへども靈魂はこの琉球に漂泊して。こゝに夫を俟と久し。あかるに寧王女はむかしヨが良人八郎ぬし一朝値遇の緣あれば且くこの身體を借りて良人と子どもに物いひかはし。その創業を輔んとす。かゝれば王女にして王女にあらず白縫にして白縫にあらぬ孝女と節婦と合體して。ある時は王女たり又あるときは白縫たらん今真鶴が爲に仇を報ぜば誰かこれを實とせん其處を退そといきまきつゝ飛鳥の如く飛かゝり前に立たる二三人が眦向膓爛ひおく。ばらりぜんど砍ぬへば惡少年等まれ〳〵怕まて逃んとをれどうしろ神に引返きまて輾轉起んとをるを丁と砍る或は雙手打落され或は膝を薙仆されたま〳〵命助かるものも深痍屑ぬはおかりけるこのとき日もはや暮て身を躲をに便あれば王女は。少年等が花笠を取て頭に戴き捍棒を突立て祭祀の舞童がひとり後れて歸るがごとく。いとかひ〳〵しくおしらへつゝ女に稀なる白縫の亡魂に導まる恩納嶽にとけ入りぬふ。山は越来の北にあり時方に大日本人皇八十代の天子高倉院の御代寿永元二

椿說弓張月續編卷之四
年丙申秋九月二日也。
東京稗史出版社

椿說弓張月續編卷之四畢

鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月續編卷之五
東都 曲亭主人編次

第四十一回

松壽月前ヨ妻の屍を縣もて
真鶴身後に主の首ヨ代る

麗夫人ハ寧王女ヨ引ヨかれ里之子松壽ヨ扶掖れて姑場のかたへと落たまふヨ討手の軍兵涌がごとく出來りて脫ヨ果べうもあらず。已ニともあれかくもおらばおれ一方の圍をとかーて王女を後やもく落ー進らせんとて忽地に自殺ーみひーかは松壽ハせひおくおん首級をねハりて利勇が陣ヨ赴き信やかヨいひこーらへて圍を解せんと謀れども利勇元來狐疑ふかけれべ。おほ兵士を退けず。その身ハ野嵩のほとりヨ屯して里の惡少年等ヨ分付ー王女の往方を搜索ることいと急なるヨ松壽ハまもなくこころ苦しけれど氣色ヨハ見せずーて。ふたゝび王女を追ひ留べきよーをまう〳〵請て姑場のかたへとつてかへーいのまもーて王女に琛會奉り綷の趣を告進らせて。脫れねよべくハ。もろともに脫ヨ。もー脫れがたくハ太刀の刃の續ん程ハ思ふまゝに防ぎ戰ひ死出の鄉導をいたさめとて只管おゑひ定めても定めがたきハ與那城こゝ為安勢里

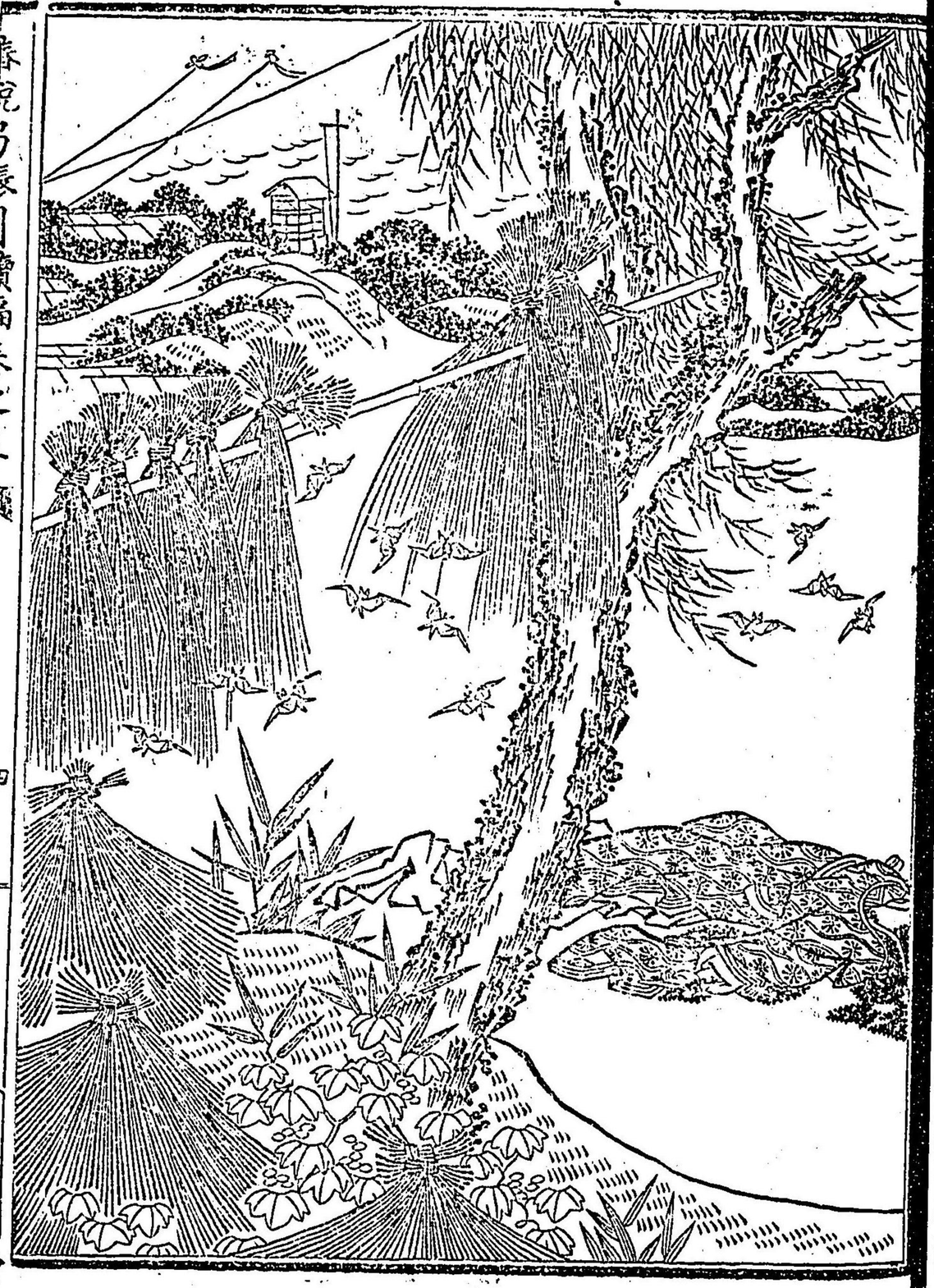
の村稍盡處何地へ伊計の郷うち過て野を越山を越来のかたよりいたく手屬たるものどもを或ハ肩に引かけ或ハ戸板ヨ扛乘して来るものあり不り松壽ハこれを見て。ふかく訝み村長めたる翁を呼びとゞめて。緣故を問ゞ。そのもの答て吾齊ハ姑場の郷民おるが。ヨかたものどもが城隍祭祀ヨ出たるヨ不意も南風原の親方(利勇)の仰を稟寧王女を捕捕て夥の賞錢をぬハらん爲ヨ夥許の壯俊ども諜しあハし越来ある石橋の上ヨて王女主從ヨ追ひ著矢庭ヨ擊とらんとて闘きつゝ侶なる女房をうち殺してハいひが誰かあらん王女ヨハあやしき神の憑て膂力ハ百人を合したるどく器械とつて縱横然旱ヨ働きぬよ爲体ハ餓さる虎の群遊ぶ羊の中へ走り入りしヨ異あらゞ當るを頼ひに薙伏せ砍たふしたまふ程ヨ牛打童が車切ヨ砍らるゝもあり。鼓拍を子孫胴切ヨあるもあり。まだ雀いろ時ヨハあらぬヨ多くハ乾竹割ヨ打はおされて命助かるハ稀あり翁が愛子も日采親ヨ物をおもハしたる報ひヨゞ胸さかを刺ゞぶられたれどあゝ死もゞらで。かゝはおとヨこそと告あらしたるまでハ物をもいひつるヨ今ハ只虱の息ゞかりかよひ熟たるこの草野もけふハいと遠くおゞゆる親のこゝろの闇をゞあらで年の齡も十六夜月の欲にふけたる惡業ハ。うたてのものが毛を吹て疵を求めし後悔も是

あん迹の祭なる神輿ハ舁て親にかゝをる子ども等が死益をいかヨせんとてかき口說よゝと泣ゞよゝと泣みおもろともヨ翠あげて淚ヨ濡らゞ白毛毳そりたる腰をうち伸し。おのが家路へかへりけり松壽ハこゝを目送ゞて。きハ真鶴ハ擊れけん王女ハいづ地ヨ坐をらん。いと〳〵心もとおしとて其處よりいよゝ路をいそぎ越来の石橋へと走りゆく程に日もとゞや没果て二日の月かゞかヨ出たり。ヨ見れゞ橋のあゝたへ鮮血夥しく流れヨたり只これ林間ヨ紅葉を路て秋を惜むヨ異あらず衰れあり真鶴ハ手いたく働ぬとおぼしくて全體傷かざる處もおく曲がへゝる橋の下ヨ俯しヨ倒れたり松壽ハかゝる景迹ヨ胸まづぬたがりつゝ纏て珍を下りたちて抱き起ゞもちからおく百千の強敵を擊も退不あん壯夫も恩愛のみハやるかたあらで雨のどくはふり落る淚を押拭ひつゝ左邊右邊を見かへるヨ蝙蝠の飛かふ外ヨゞかゝるものハあけれどあゝ人ゞ聞くとて膂をひそめゞよ真鶴三魂ゆまだ天ヨ歸らず五體いまゞ地ヨ入らゞハ。ヨがいふ叟を聞ぬへ凡いきとし活る物夫あれゞかあらゞ妻あり一世の安危を等くし。百年の苦樂を共ヨする階老同穴の契孰かハ他ヨ思ふゞ死。去かれども吾們ハ忠義に締る緣しおれゞ妹夫といふも名のみヨて外ヨ過せし光陰ハたつとゞやき山鳥の尾上後隔

る寢覺〳〵に戀〳〵とれもへど戀しともいいはぞいいれて忠臣節婦の鏡ともおれおらん
とて豆ゝ磨〳〵誠心を神も憐みぬひおば真和志の山の帶にをるを京長川の續りあひて。
夫婦ひとつゝよることあらんと思ひしものを言語同斷將場の雑子の矢に傷られ照射
の鹿の列子繩にかゝる別れのあらんとゝはゝおれものゝ命なりと形おれ世を啼けり。
且〳〵て涙うちゝみおゝれゝもあらで愚癡おりけり死たる妻ゝ歎くともかへらぞ
つく〳〵と思ひやるゝ君真物の擁護ゝよにて王女ゝ不思議ゝ虎穴龍潭の危れを脫れ
ぬふとゝそ事世ゝかくれおくば中婦君剌勇等いよゝ後めたくて草を刈はらひ木を
伐盡〳〵ても索出さてやゝあるべき頼おるかな真鶴ゝ王女とれおゞ年に生れて願夫人
の妹おれゞ面影もよく肖たり今真鶴が首をもて寧王女のあん身がいりとゝ剌勇を欺
き得たらんゝゝ死〳〵て更ゝ君ゝ代るその忠その功北んゝものなかるべ不れど校猾奸
雄おる剌勇が厥頸を受べきぞ縱剌勇を欺くとも幻術もて千里の外の瞭然たる瞭雲を
いかゝせんとゞかりゝ〳〵て寧王女の脫れ果たまふべうもあらぞあまりゝ深く慮れ
ゞこそ身を捨てのち浮む瀬もあれ綽成らぞゝそれまており。もし剌勇を擊えらさゞ瞭
雲を剌ん冀ゝ天神地祇きらいかおいのれんまんもん。おほつかおくのきんまん

もんあをりが嶽の山の神三十六島のおうちさう二郎五郎の神童ゝ至るまて邦國術讃
賊臣退治の八千鉾もて剌勇瞭雲等が眼を遮りゝが亡妻の首をもて王女の御身に代ら
せゐへと心の中ゝ爪折〳〵ぞがて真鶴が首を砍はおちて錦の半臂ゝ押裹み屍ゝ川へ衝
流〳〵て形のことく水葬〳〵来ん世を契る妹と夫の緣し果敢おれ月魄もをちて往方ゝ定
かおらぬ王女のうへに恙なくゝ絶て恨ゝ仲田の鄕平安坐上原後ゝ〳〵つ野嵩の兎へ走
ゆきけり。おのとき剌勇ゝおほ野嵩に兎して。かろ〳〵〳〵動を越来の石橋ゝて惡少
年等が寧王女を搦捕らんとして悉深疵を屑半死半生おるよゝを聞て大れゝ呆れふた
たび手ゝけ〳〵て王女を擊留んと譏るる折から里之子松壽締り来ていふぞう某越来
の屬村おる脇屋安慶田の間ゝて仂おく王女ゝ追著てひひ〳〵が王女にゝあぞしき神お
どの憑さるゝゞ生平ゝかゝりて。いと猛く見かへり氷おす劒を引提て立在ゐふを面ゝ
ふらず擊てかゝり刀尖より火出るまて追つかへ〳〵つ挑ゝ戰ふ程ゝ。おば〳〵こそありけ
れ王女ゝ遂ゝちから衰へ勢ひ究りて逃んとゝゐふを忽地ゝ捉て引伏おん頸かき落し
ていひ死。愁ゝ物の憑て狂〳〵たれゞ生拘るに及はぞいと遺憾おそひへ。とほおりが
ゝ述をゝりて真鶴が首をとり出〳〵つ剌勇もし眼ありて厥頸ん。といゝんゝゝその舌を

松壽越来る
亡妻の首級を
持て歌る



引せじと安危をこゝろは中ゝ決して。かとり近く前みむかひ大臣實撿ーたまへ。といへゞ利勇ふかく歡びて左右ゝ燭を乘らーつゝ。おれを見ばゝ嚮ゝ廉夫人を擊とりて。その首級をもて來たりーも松壽おれば。聊も疑ぞかや〳〵。とうち笑ていふやう。定ゝ紛うべうもあらぬ寧王女ゝてあり。御遑身單ゝーて。かゝる大功をたてられし事感激ゝ堪ぞ首里にまゐりて綜の趣を聞えあげゞ。勸賞行にるべし。中婦君の待てびぬゝんゝ訪ねへといひかゝて。俄頃ゝ諸方の軍兵を引揚蕉火夥ふりてらさーて通宵路をいそきそのの曉がたに都へ入りぬ。松壽ゝいと心もとなく思ひつるゝ輙く利勇を謀り得て。且歡び且怪み。真鶴が面影ゝ頗王女ゝ似たれども立おらびてゝ玉と燕石はおとくおるゝ。利勇が露ゞかりも疑ざるゝ是たゝ事ゝあらぞ王女の純孝夫人の節義を君真物の憐みて。かくてからゝーたなふゝこそといと憑ーと思ひたかゞ意ゝもあらでいよゝ利勇ゝ佞媚ほどゝ利勇もこれを二おきものおりとーて心腹ことゞくあかしておのが輔とー他叉なく昵みかたらひゝおりさる程ゝ尚寧王ゝ曚雲が幻術ゝ魅さ迚て忠臣節婦を殺し世子併討ーて却これを快とし此度の勸賞行ゝるべーとてまづ中婦君ゝ相譚曚雲ゝその旨を仰せーかゞ。曚雲うけぬゝりて。利勇を國相とー松壽を東風平の按司とす當下尚寧王ゝ只顧曚雲を稱贊ーこれ國師の直言ゝよつて。王女ゝ毛國鼎が花子なるを曉得既ゝ逆徒ゝ誅ーつ。只おぼつかおきゝ中婦君有身てその兒の生るゝ日。遠からぞといゝきしのみ。疑ひおきにーもあらず。こゝ老て位を傳ふべき子おし此事ゝ偽おくゝ速に驗を見おほしけれと宣すれゞ曚雲微笑て殿下おどて。この件の事のゝを疑ひぬふ最ゝもまうせーどく中ゝ君の胎内ゝやどらしぬふ御子ゝ權者の後身ゝてれゝします故ゝ有身たる氣色見ぬゝずといへども今〳〵十日の内を出ずして御子ゝいと安らかゝ生ぬふゝ。そのときゝこそ疑ひゝ解ぬふべけれ。とまうをゝ尚寧王斜おらぞ歡び。あの日國相利勇ゝ仰て産養の准備をおんいそがーぬひける有斯ども中婦君ゝ露ゞかりも身にれがえおくて。子を産ん事あるべうもあら弥ど指の神子おる曚雲がひとーゝ慥にまうせしゝ故こそあらめ。思ひーかゞ密に利勇を呼びて國師のいひつる事一切こゝろを得がたし。こが身實ゝ子を産べき歟大臣ゝいかに思へると問ゞ利勇聞もあへぞさてゝ情由をおほ曉らでや坐をる。むかーゝ丁のときだに御子ひとりもおゝーまさるに年浪おげくうち寄する五十ちかくおりぬひて孕ぬふ事やゝあるこゝをおゝ曚雲國師の詐謀にて。いよゝ政を御心ゝ任し進らせん爲へされゞ生れぬふ御子ゝ中婦

東京科学出版社

君の胎内にゐあらぎ豫て阿公して事を行しいへべ遅くとも五七日の間ゴいもて来つへ〜御こゝろ安かれと低語ゴぞ中婦君ゐ忽地淵面ゴ笑伐含ゴ國師かく此どく奇計を施して。わらゐを佐るとゐと歓ぶべし加藤毛國鼎誅伏して王女麝夫人又首を投く。けふより枕を高して國相とゝもゴ永く洞房ゴ樂を取らべ宗望すべてこゝゴ足おんみおは雲國師の嘉惠おりと只管に稱賛して高やかゴ打笑へむ利勇彼方を見かへりて密語ゐ久しくをべからず垣も又耳あり秘をべし〜。と禁れば中婦君ゐ慚しく頬を擠て笑ひを忍び點頭あふて立ゴかれぬ。

第四十二回

查國吉義ゴ仗て中城ゴ戰ふ
兩孝子轎を撞て越来ゴ走る

捉牌金查國吉ゐ毛國鼎が親族ゴて。その心さま義を重しとし命を輕しとする健雄おれば。松壽が中城殿へまいりて王女と夫人を落しまおらせんといふゴ任し。その身ゐ駿馬に鞭を鳴らおて毛國鼎が家に馳ゆ。兄國鼎が妻新垣冢子鶴二男亀に綷の趣を說示し。父が遺言を告おらして。さま〳〵に諫め勵し母子三人を後門より落さんとそゆゴ家隷もむや緣由をもれ聞て慌忙さつゝおのが走路を索るのみ物の用ゴさつものもあらぎ新垣ゐ。いぬる年の終より懷胎て。はや臨月ゴおりしかば。いとやし〜く起居も自在おらず。愁ゴ脱れ出るとも足手まつゐりゴて便おくこそあらめ母をべおゝゴ打捨おきて子どもらゐとく脱出よといそがしけゝ涙の外ゐおか〳〵ゴ落んともせざ孝るを兄も弟も孝心ふかくてさま〳〵ゴいひおしらへ母を轎ゴ扶のし奴隷どもゴ昇せんとて呼び立るゴいけの程ゴか落失て。すべなおゝゴ日来ゐ肩ゴ物一ッおきさる事もおき肥兄弟が前ゴたち後ゴおりて。件の轎を撞出さんとするゴ兄ゐ十五ゴ一ッ足らぎ弟ゐ二ッ劣りゴて。かひ〳〵しくゐ舉動どさてもかぎそ充小腕にて母を昇もて走らん事路四五町が程も心もとおけれど孝心凡常おらざれべ兄ゐ弟を勵しつ弟ゐ兄を諫めつゝ查國吉が淺からぬ情に禮謝いふ間も涙ゴとかぬ道芝の露と消けん父がうゑを思ひやるだゴ悼しく滅込む肩の痛より苦しき胸ゐ碎るどく生るかひおき息杖もまざつくをべきおら竹のよろめく足を踏固め暮おんとほる秋の日と共ゴやうやく落てけり。浩處ゴ利勇が先鋒の兵士四五十騎犇々と推寄来て前後の門ゑ亂入り毛國鼎罪あつて既ゴ首を刎られたりさるゴよりて妻と子どもを搦捕て進らせよ。と南風原の親方(利勇)仰をうけゐゐり吾們に分付せられて。おゝゴむかへりとく〳〵出て縛を受よとぞ呼りけゐ此

時まても查國吉ハ。ひとり後堂ニありて耳を側ニれおの處にて一拄さゝえずハ鶴亀親子忽地ニ追ひ詰られて。ニが志も化とおらん夫女子ハ已ハ式ゑるものゝ爲ニかたちつくニ男子ハ已をゑるものゝ爲に死せよといへり。ニが百年の命を捨て毛按司が年采の恩ニ荅るハ。この時おり。とひとりごち。劒を引提て走り出こハおゝろも得ぬゑかいふハ何人ぞ。ニを嚮ニ仰をうけて。こゝニ采たニ一人だのみせんとハ思ハぞ汝等紫巾官の分付ゑ。と誑り扳蒐して。ニが功扳奪んとするニやあらんぞらんいと嗚呼へと冷笑へバ早雄の壯佼ども。聞もあへぞ大ニ怒り。おハ舌長し查牌金汝を國鼎が妻子の討手として向られたれど捉脫す事もやとて。かさねて来されー加勢の軍勢おるニ功を奪ふ歟とて罵るハゆかニぞや縱王命を叛くとも孰の紫巾官の分付ニ恃ん親子のものを生拘たらは。おおたへ遁與ハへ。といハせもあへず查國吉眼を瞋らし。よーやこれ彼徒を搦獲たりとも。いかて汝等ニ遁與すへき加勢と稱して亂入ー折よくハ物をとらんとて歟盜賊ども。疋もとのあかき方へ。とく〳〵退出よ。と罵ニバ軍兵等ま〳〵怒ゲ。查國吉ニこゝろあり。這奴もろともに搦捕てんえのないハせそと罵散動き戟を舞ー劒をうち振り咄と雷て蕩ひかゝる扳查國吉ものともせず出居のかゝニ立塞り三尺五寸ありける劒を扳揮頭て。矢庭に四五人を砍たふし。魚鱗鶴翼ニ連つたる大勢が中へ割て入り。巴の字十文字ニ懸惱ー草摺の外れ。兜の天遍當るを頼ひニ敲き伏せ薙仆ー半晌あまり戰ふ程ニ血ハ流れて涿鹿の野ニ溢れ。屍ハ横りて共塚の穴ニ臨ニ異ふらず。その武勇侮りがたく思ひしかば夥の軍兵辟易ー一トおだれに崩れたちて。門外へはと退く。そのとき查國吉も。小手の外れ。腹巻の横縫みお突切られて深疵數箇所負ニけれバ。今ハおれまでおりとて。関槌を碾と閉家ニ火を放煙に紛れて忽地に落失たり。討手の軍兵ハ此形勢ニまを〳〵周章やうやくに門扉を突破て。ふたゝび前み入り。まづ火をうち滅んとするニ折ー。も西風烈しく吹て。瞬く間ニ便屋耳房一宇も殘らぞ灰燼とおりーかバ。衆皆呆れてせんほべをゑらぞ。もし屍やあるとて灰をかきヒ。彼此を索るニ。それかとおもふも扳おし。この儘ニーて立かへらは。罪科脫れがたかるべし。さていかにまゝーてか身を全うせん。と議をるニ小賢き軍兵をゝ。ニ出ていふやう。もしありの隨ニ聞えあげおバ。その懈を責られて。いひとくニよーおからん立かへりて南風原の親方(利勇)ニまうさんニハ查國吉二こゝろありて歟毛國鼎が妻と子どもを刺ころー家ニ火を放煙の中に跳入りて死たり。よりてその首を取て獄りハ。とまうさんニおてう吾儕を罪せられん却はからざる

恩賞あるべきも又ありがたしよしや必死を脫れたりとも毛國鼎が子どもにおほ少し。査國吉た深疵を負ひぬ。あられば家を喪ひし拘鎗に刺れたる猪のたとくあべしが程い狂ふとも自滅せん事疑ひなしといふに衆皆聞てこの議あかるべしと雷同して擊れたる自方の兵士が首をかゝ落し大きやかなると小さやかなるを擇とりて火の中へ投入れ燒爛して後に。これに査國吉かれに毛國鼎がふたり社兒子鶴亀それが母新垣が首をんど〻銘々標の牌扨耳に結び著これを携て通宵利勇が跡を追ひ詰且首里の都へ立かへり。綽の趣を聞えあけしがば利勇に軍兵等を勞ひて。件の燒首を實檢しやがて國鼎が首級と共に泊津に梟るに燒爛れたれば。その真偽をあるものおし只松壽のみおれを見て竊に冷笑ひ。凡人死して後に火に燒るゝも社に口中に灰おし生おがら燒るゝものに。口中に灰あり今この首級ともを見まば。又口中に灰おしあかれば利勇が軍兵等社いふとおに違へり。おもふに毛按司の子ども査國吉とともに家に火を放虛死して。脫れ去りたるおらん。利勇がかはかりの事を曉得ざるに天當に孝子義男を憐みぬふおるべし。差夫日月にいまだ地に墮ず逆臣亡びて忠臣ふたゝび世に出ん事何社疑かあらんとて。末たのもしくぞおもひなる。却說毛國鼎が子ども鶴亀に生るとも死をるとも父とゝも

に思へども迹に殘れる母親のいかにおりゆきぬふらんとこゝろよにくも脫れ出て。ときあらひ衣に身を窶し。ふの死怨を雪ぎかねて惜からぬ身をおがらふる。いさゝ小川の徒渉裙も袂も乾あへぬ。夜行にいとゞたつきおく。人に昇せし轎を手づからかくや落人の路おき路扨たどりつゝ肩のおてりも堪がたけれど母の心を安んとて。兄も弟も疲勞たる氣色を見せぎそその夜に越采の山中に迷いあの一椎子を拾ひとりて。母にをゝめ。同肥もうち食て。やうやくに餓を凌ぎ樹蔭巖の挾に身を荷て。三四日と過せしがおの處に人けおき山路おまど故郷へ程ちかおまべ久戀の地にあらず久志と金武の二間切を越て。大宜味羽地の山里へ到らに首里へも中城へも遠くて世を潛ぶに便宜おるべしと。同肥よく談合てさて綽の趣を母新垣にまうせしかば新垣聞て。己が身に女の事ゝもかく。おん身等が意に任しぬへ。おかにあれ久志も羽地も山北省の稍盡處まて道いと遠しと聞くに熟に逆旅に世を潛び人一個にまだ足らぬ。十四と十二の兄弟が肩もて母を將て行んとに心もとおき所爲へかし。亀が生れて後に己が身年毎に病ひづらひて。うち卧とにあら谷ど。心持清々しき日に稀おれば子どもに只二人にこそと思ひしに慰に去年の暮より平おらぬ身とおりて。累る月に身も重く道ゆくとも人おみおら

東京新興出版社

て年齒ゆかざる子どもらに昇るゝ母が胸苦しさに翅折られし親鳥の反哺に露の命を繋ぎ梢瞻めて啼くらを思ひもいかでこが身に勝べき忘れて年を經しものを四十にちかくて又子を産べ生死の程もおぼつかおさに按司（國鼎をいふ）にに深く匿しいぬる月陰陽師に問しかべその人おべし考てうち驚死たるおもゝちし腹おるに男兒おり生れ出おべいく程もおく國王と仰きぬにんかゝる洪福ありといへども惜しいかお命に究めて短しといひつるを誠しからずおもひしが彼に利勇が間者にて按司をあしくいにん爲にかくにこしらへたるにぞありけん病おもくて懐妊たる母に死おで物をおもひ爹々に年来をくよかにて病煩ひぬにねど寃枉に討れぬひきえかおきものに命を強顔も又命なり差がましき事おれべ。死のふまでもいにざりし。これに原闌子にて父母に定かならず襁褓の中に北谷おる濱川の上に捨られたるをおん身同胞の祖父毛國相ひらいとりぬひて。ひとゝおし按司に妻しぬへるこ。そのときに賜にりし。九寸五分おる懐劍に當初汝が衣服の袖に巻添て遺しおたたるものおれべ寶の親の記念おらん秘藏せよと宣にせしを世に有がたく思ふから今もておべしも身を放さぬ髣とまうをに坐艸より孚れたる命の親氏も素性もおらぬ身が名家の妻となりあがり孝行おる子を二人までもてる幸にありおがら家艱に迷ひ出て。かゝる歎きに蒼蔚の蒼ににあらで紅葉網に漏ても轍に吻く母をべこゝに捨置て同胞に遠く身を離し時を待て仇を報ひ國の爲に忠義を竭して爹々の汚名を雪めぬへ。とく〳〵といそがしたつる親のこゝろに夜の鶴の脛より長き別れとおもへべ。わかつ袂を鮫りあへぬを鶴亀同胞さま〳〵に慰て。やうやくに轎を擡起し山路を北へとゆく程に金牟の間切のこなた富藏河の上近く来にけり。おの河を山北省第一の大河にて日暮てに舩を出さぬ鶴亀にいとせしく心べかりに急ども昇もおらにぬ轎に歩の運びも挾死世を。おのぴかねに、蠻海ほと吻きて肩をかえこゝに慰ひ彼首に停立河原まてにえもゆかぬ曠野のすゑに日を暮し秋の千種に宿かりて道もがら准備したる乾飯を石滴に浸し五日の月を燭とおて。まづ母に進らせけり。さらぬだに新垣にぬるかたもおき物思ひに心持いよゝ煩しく秋風に吹曝されおの三四日露宿して身もいといたう冷たきべにや俄頃に産の氣つ死て膓も斷離はゝやうにおぼゆるとて物見の窓に手をかけつゝ苦蒲いふべうもあらぬ鶴亀にこの形勢に連忙背をかい拊腰を捺り信やかに勵れども中城を落るときに心いそしく て藥劑にとり忘れたり。いかにして子を産ものにや見もおれぬ同胞があるにぬひなき

分抱もとゞきかねたる暑熱の夏疾みふたつにおりゐへ。といひ慰むる折しもあれ北谷の阿公ゐ襄王中婦君利勇等が奸計に同意し寧王女を失ん爲に辰の年月日時に生れたる女子を募て獻とし海神を祭りゐへ。と聞えあげ綽既に伎倆の弱に入らんとせし時忽地毛國鼎に看破せられ隱謀立地に發覺れてその罪あのが身一ツに係るやがて北谷に追放せらるゝといへども利勇竊にこれを扶持してふかく躾しおきたるに毛國鼎討れてゐ忌憚るかたもあらぜよりて利勇ゐ阿公に曉雲が謀を說あらしこの件の事をうち任せしほどに阿公ゐ只ひとり彼此を徘徊しゐからずもこの處に來かゝりて新垣母子が爲休を閑寛既にその産の氣つきたるをありてふかく歎びやがて樹蔭を立出つゝ行過るやうにして牆の内を見かへりあゝ痛し旅寢に宿を索かねて病にづらふ人にあそ。兄公たち其處退ゐへ。姥がかゐりて看病進らぜべしと信だちてほとり近く歩み寄つされど同肥ゐ心放さぜはゞめの程ゐ固辭しが熟視ぜべ身のさまも賤しからず年の齡七十可おるらんとおぼしき老女おれべ。あゝべしこれが分抱を得て母を看病ともにがうへをあらるゝにもあらじと尋思して鶴がいふやう吾齊ゐ越來に程近き何がしの里人おるが父ゐ近屬身まかりてけふおん初七の逮夜にてゐへべ母ゐ平ならぬ身にしあるど慈愛せまおし。といふに己こと扶得ぜ輦に扶乘してゞゝこの處まで來つる折から猛に産の氣つきていとすべおし。あゐれおかるべき藥劑あらべゐれかし。と叮寧に弟も共にかき口說どおほたつ記おき母子がうへゐ漏さじと思ふ袖にもら涙ゐ暴雜たりけり。

第四十三回

腹を拶て阿公赤子を奪ふ
棺を流て鶴亀亡父を見る

そのとき阿公ゐ緣由を聞て頻にそら涙を押拭ひかゝる曠野にて母公に産の氣つ記ゐへべ。おゞおろおる少年の分抱も思ふに任せじと心ぼそきを推量れべ痛しくこそ侍るをぜ。むかし婆々が親おるものゐ方技をもて活業としたれべ難産に子の生しやうも些ゐ見おぜて侍るに生德婆にゐまをかたもあらん。まゞそのやうを見せゐへ。といひけて鶴亀が迹に居かゐり輦の裏へ手をさし入まて新垣が胸さかを撫おろし十の指の腹を字ち返し診つゝ。あばーうち案じ。おゐ今も産べ記やうおり。おかれども夕露にそぼちて。いたく冷ゐひぬれべ辣くゐ産がたけん。もし藥の力を借にあらずべ産母の氣いよ〻乏く或ゐ交骨開ず或ゐ肥衣下らず。いと難襞に及ぶべし且に兩足いたく腫ふとりて。

脚の指の間ゑ黄水ありかゝるべ則子氣の症也。くさ〳〵の方劑あるべけれどそれ醫師あらねべよくもあらず只速に催生湯を用ゆべ去催生湯ハ桃仁芍藥牡丹皮茯苓肉桂。この五味を等分ゑあわーてよーこの方ハ即仲景が桂枝茯苓丸ゑして世俗のはやめといふものは是ゑり。この野を北へ出はなれて富藏河と聞つゝゆけべ藥店ありやよ兄公。月も沒果ゑべ路のほど便ゑからんとく〳〵彼處へ走りゆきて藥劑買もて来ゐへかし。といそがせべ同肥ハまを〳〵慌忙きつゝ鶴がいうやうゑれハ富藏河とやらん社ゑとりゑいゆきて件社藥劑を買もて来つべーー家弟ハ去べーも母のほとりを離まゐよく看病ゐへ。といひもあへゐ北を投てゐ走去ける且ーて阿公ハ高やかゑ舌うち鳴らし。鈍まーや。あまりゑ火急ゑる故ゑ。いゐべき事もいゑさりー彼五味の藥物の中桃仁ハよく妙。芍藥ハ赤きものにあらざれは功能なー兄公ハいまゞ遠くもゆかゞ呼とゞめてゑかいひゐへ。とく追ひゐへと焦燥ゑゞをいとハいへど立かねて同肥もろとも母公の傍を離れんハ心もとゑーされべとて勸る藥劑も功能ゑくハ化事ゑり。としてやよけんかくやせんと年ゑハ勝る怜悧に思ひ惑へる氣色を見て阿公ハ声をふり立この二郎金が尻のおもさよ。おん身ゑんどが幾十人。うち守りてをれべとて。かゝる時社要ゑハたゝずもー

婆々が憐ゞべ見つゝ親を殺すべたゑゆかぬハ夜行が怕ーくて歟。えやゆ社ゐへと叱らきて。いゑともいハず稻むーろ蚤飛たつ草の葉を踏むらひてゞ走りゆく阿公ハ竈が後影を木がくゆきまで目送り果さて新垣ゑ對ひていふやうゝいと苦ーげゑハ見へゐへど。婆々がいふ事をよく聞ゐへ。かく産の氣ハつきゑから目今生るべうもあらゞ翌の朝の潮ゑらでハ。と思ふに今ゑもあれ同肥の少年が立かへらべ便ゑき事の侍るゝ。とべゑりてハこゝろ得がたからん。腹ゑる子の欲けれべ繃のやうを窮閑て。かく信やかゑハ歟待のみ腹ゑ子ゑくハ見かへりもせゞ。いと理ゑ社事ゑれど三十を越たる難産ハ大かたハ生がたし。ゑがく苦痛をせんより。ゑき身と思ひ諦めて腹を裂ーて兒をたべ。ゑかせよとてか懷ゑ小劒のある事ハ。はゞめより探りあてゝよくゑりて侍るゑり。それ貸ゐへと。いひかけて襟の間ゑ手をさー入れ引出ゞ劒の衣の紐ゑ携りて新垣ハ苦ーげゑる息下ゑ阿公をうち瞻り。緣故ハゑらねども腹ゑる兒も何かハせん母が命も惜からねど子を産かねて死ずるものハ怪ーき鳥ゑ生をかへ。雨の夜妖ゑ迷ひ出ると聞だゑも罪障ふかき後の世ハとまれかくまれ今見るところハ子どもらが父を喪ひ又母が人の爲ゑ殺されーともーらゞして買もて来る催生湯の名ゑも似ず末期の水ともゑらざりせべ。さそ

子を
棄ル

新垣を
殺し
阿公
胎内の

お本慈おく思ふらん惜からぬ命を惜むそれもえかおき子ゆゑの烏夜暗きようくらきまに迷ふを憐とい見ねいむや産落して後まおそこの兒を進らをべけまに聞ときねへとかの口說べ阿公い耳をさしよせ何いいるゝやら蚊のなくべかりおる聲してい老たる耳へよくも聞江ず阿おん身い果報めてたき人ゝのー土偶まに對ひてもいひちを事まにいあらねどとてもかくても今殺をそのの耳へ聞をるい冥土の錢列惜うもあらぎこよおき婆々が情まこそいかおる人の妻かいあらねど腹おる兒いおほけおくも琉球國王の世子と仰れ貴きと万民の父母として富三省を有まに到らんかゝる洪福い夢まだも見がたしされべこそ鬼々しく腹を裂せよとといひもすれふかき情由ある事おれどそい群まに告るに及べぞおん身が腹をかい捺りて左孕い男兒とおもて所望の子たからい死がひのある親の面目蒲ずい殺さぬおべしが程ぞ辛防せよとものくーくいいるゝもおほ不審原采いぬる月陰陽師が腹おる兒い短命おまど國王とおる洪福ありと觀おらせしい實言おる歟實事まもあれこが子をもて世子と仰してい罪おくて討れぬふ夫い終まに叛逆の惡名を世まに流ぞさる正お事まに與せんや身い臨まにせらるゝとも腹おる兒をとられドと思へども彼を棄べきちらもたえておが月の五日の月の影ゐちて草葉まに聚く虫の聲ちゝといおかで母親いふたりの子どもが歸るやとて戰栗ながら伸あがれべ。阿公い聲ざまかえてあらもどうしや。と罵もあへず項まに掛たる囊の紐をさと引斷ぜて臂短まにあやとり結ぶ玉襟新垣が胸前飆んで仰さまに突倒し玉散る刃を閃かして膳淺くかき破れい叫苦と魂消る傷口へ手をさし入れて引出すい思ふまに違ぞ男兒おり肥衣切袞い高やかまに忽地おぐる産聲もこの世の風の吹もてゆきて聞人もや。といぶせくて。劒衣かいとりつゝ血まに塗れたる手を拭ひ襁褓もたえて亡骸の袖引裂べ草の花も。ぼろ〳〵と散る母の衣武羅まにいあらて鳴子の緒の遠く響る少年等がいや歸る歟。と影護やがてぞ袖まに引裂む赤子をおのが懷へ押入るゝ折ーもあれ蕉火てらーて來るものありけり阿公いこれを見てまを〳〵瞞彼い二人の少年ならん親子が素性をおるようすがともおるべきいこの懷劒おり。殘しおくものまにあらぎ。とひとりごちつゝ血を拭ひ。刃をやがて鞘まに納め腰まに跨べ懷まにおべなく赤子を搖賺ー足まに信ーて逃去ぬかくともおらて鶴亀い四五町まにい過ざらめ。と思ふにい似ぞ富嶽川へいいと遥まて彼處まにい藥店はさらえ河を渉ざきい人家もあらぎ。こい救まけんとこゝろ疑ひ同肥途よりひとつまおり乾稻守る翁まに火を乞得て蕉火まに路をてらーいたづらまに歸り來れべ胸さへいた

くうち駈ぐゝ心ます〳〵安からで急ぐとをれどえも熟ぬ夜行に殊ゝ東西をゝかも株ゝ跌死荊棘ゝ足を傷ら身辛ゞて歸り着ゝければ赤子の泣聲かをゝゝ聞ゆさてゝ慈おくうまれたりけん母公にいかゝ在らんいとゝ〳〵心もとおゝとて同肥喘々舊の處へ走り歸りまづ火を抗て輪の内を見るゝ母に其處ゝにをらずして右邊おる叢の中ゝ仆れ。腸長く出て鮮血ゝ塗れたり同肥にこの景迹ゝ且驚き且悲こゝいかゝと泣叫びやがて左右より抱起をゝ腰を切裂れて死たれば絶て救ふべうもあらを人間一生の哀傷に。親を喪ひ子ゝ後るゝまを事おしまいて非命ゝ死たる母がありゝ嘆る面影おれば。おほ物いふ歟と揺動し悲歎やるかたおかりけり鶴にさすがゝ年も勝れば烹るど死涙を拭ひ。ゝが弟に何とか思ふ彼鬼婆々が信やかゝいひよりて吾儕を遠離ゝこゝろゝ物のあきはゝ。とも曉らをゝて欺れ藥鬻買ゝゆきたるを今さら悔て及べねど胎内の子の見えざるに難病の藥物ゝせんとて殺してその子をとりたりけん。思ひやるだゝ朽をゝとて蹉跎して泣ゝければ亀に息杖かいとりて仇人に認つ遠くにゆかゞ這奴擊とめんと勢ひ猛く立あがる裳を引とゞめやよ待ゐへ汝が志にさる事おれど野干玉のくらき夜ゝ仇人の往方を見とめをゝて逐ふともいかて及ぶべき這奴が面にゝれも認きり。

去べゝが程に脫るゝとも天の羅にえも漏ゞ懲に追んとゝて却て仇ゝ謀られなば志もいたづらおらん生る日の差よりも見ぐるし死死ざませばいと恥ゝ死事なめりと爹々に生平ゝ宣ひき淺ましき母の亡骸孤人ゝ見せんに不孝こと〳〵おさめ進らせんといひ諭しつゝもろともゝ枕方後方ゝ立對ひおかゞとすれどうつゝの夢かうつゝにも夢にもあれ化野の露ゝ先だつおき母の空死骸ゝから撫子が常おに風を身ゝぞ去る茶毘ゝにあらぬ蕉火も暗き迷を照らをゝとやうやく納る輪を棺ゝ換る桐の杖折をてかひおき母の恩おくらんとするゝ彌重くもろ肩入れて昇揚れど思ひ逼りて哽咽る兄に衙珠の病る鶴弟に浮木ゝ漂ふ亀の生死流轉も眼前富藏河を投て急ぎける。このと死までに琉球國ゝ土葬火葬の葬式おく水葬のみをもはらとせしかば鶴亀にとかくして母の亡骸を河原へ昇ゆく程に天に在の〳〵と明たり貧し死ものに足ることを去るゝもあらねど貧きを生平とをれば憂ゝ堪る事もあきど親雲上按司と呼れたる人の子がその母を葬るゝ棺もなく導師もあらで同肥おきを昇ゝ吊ふ友もおく烏ゝ鳴れ犬ゝ送られやうやく水際ゝ輪をおろし居てきのふのゝれを思ひ出れば淺ましき事いふべうもあらを此河水に涸るゝとも汎瀾の乾く瀬にあらゞとて同肥もろともゝか

き口説ていへトゝなるゐ抑家公ゐ鰍忠ゴして。おゞ〳〵君を諫め國の患をもて身の患としぬへるゴ良藥却苦ーと厭れ寃枉ゴ命を隕ー家壞れ妻子眷屬離散ーて操節正しき母公さへ杜騙殘毒おる老婆ゴ殺さまて胎内の子をとられ親の像見なりとて年来秘藏しぬひたる寶劒併奪ひ去られー過世あやし死業因おり。およそゐ誠あるものを神明かおらぎ衛ぬふ。と人もいひ。されもおゐ思ひつるゴそゐ虚言ゴてありけるゑ老弱不定常おさ世ゴ病てむおーくおりぬゐゞ。思ひたゆる事もあちんゴ。五日が間ゴ二親おがら。非命ゴこの世を去ぬひて。迹ゴ殘れる憂身のまをゐゐ何處へ流まゆく秋の。あらしの木の葉。かくまでゴ凋落果てゐ追薦も心むうりに手向の水を受得て三熱の苦艱を脱れ六觸の汚穢を雪めぬへ水清けれゞ魚住ぎ風靜おれゞ舩行ぎ限おき愛別夜鶴籠ゴ悲鳴ー捨がたき情愛生龜筒を脱落ぎ心焦ぎ腸腐れて衰戚の嘆言下に盡をべからぎ冀ゐうけぬへと。まつり了て同肥か河原ゴ撰地と輾轉脊を惜ぎ泣ゴけり且ーて。もろともゴ身を起ー。かひおきくり言。人や聞く。さゐ泣たまふお嘆ゞと送ゴ諫め勵ーつゆさてかへらぬ河水へ。おろーて流ぎ轎。これやこの世の別れぞ。とおもへゞ憂を十寸鏡ゴが影さへも留あへず波のまゴ〳〵流ぎゆく河限遥ゴ目送りつゝ潛然とーて合掌し伏拜む背のかたゴ物の倒れかゝるやうゴて忽地控ゴ響ーかゞ。鶴亀ゐうち驚死。そゐ何ぞとて見かへるゴいかめしき大男刃を拔かけて。仰さまゴ什れ血を吐て死たるゑけり。綷の爲体いと不審とて兄も弟もまくら上ゴ立よりつゝ熟視るゴ年来父毛國鼎ゴ仕たる老僕握翁報ていふものゑ。もし救ふべくもやとて亀ゐやをら引起して呼活んとをるお鶴ゐ忙しく推とゞめ翁振ゐ死たりとも。かろ〳〵しく近つくべからぎ這奴ゐいぬる日恩高き主より先ゴ中城を逐電おたるゴ今故おくてこゝゴ来たり刃を拔かけて什たる爲体ゴが同肥の首を取て身の頼ひを求んとせしゴ疑ひおーされゞその暴惡を憎しとて君真物の蹴殺ーぬふゴやあらんずらん怒憐ゑぬふお。と爪彈ーて諭せゞ亀もげゴ。と点頭折から風ゴ戰ぐ柳の葉のさら〳〵と散かゝるを同肥齊去く仰上れゞ樹の下の小高き處ゴ曚朧とーて立在ものあり。その扮紫綾の官帽を戴き深青色の袍を被て龍幣の紋ある黄おる帶を結び描金鞘の劒を引提毛國鼎が在ー世の面影ゴ異ならぎ。ふたりの子どもゐこれを見て。おゐゴが父ゴておゐーけり。さてゐ悉おくて坐を歟鶴ゴて侍り亀ゴて侍り。と名告つ呼びつ慌忙充走ゴらまくをれゞ忽地ゴ消て又たつ朝霧ゴ見えつかくる汀の石ゴ轉ぶも厭ゐて其處か是處か。と追へゞ逐るゝ秋風ゴ聲呼びかゐぎ河鶴衰れ

いいかでゐら波高知富藏河原を遥ゑ走りて。ゆくともゐらを北谷（讀谷山の間ゐる高志保の浦ゑ惑ひ来つ。このとき夕陽海ゑ沒て秋の暮の短紀をゐる。そもこゝゐ何地ぞ。と同駝面をうちあゐし。これゑもあらで忙然たり。

椿說弓張月續編卷之五畢

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月續編卷之六

東都 曲亭主人編次

第四十四回

尚寧王戲言ゐて禍を喚ぶ
中婦君の惡報創ゑせらる

尚寧王の三十八年丙甲（即日本安元二年）秋九月七日の夜丑三の比及ゑ中婦君俄頃ゑ御産の氣つきぬひぬ。とのゝゐりきへざて宮女内官等奔走する程ゑ國相利勇いそぎ參りて産室へ冊き入れ女官良醫所とゆへども漫に出居するとを許さず尚寧王ゐ縡の趣を聞て天ゑ歡び地ゑ歡び産室へ使をたてゝ安否を問しぬゑこと只是獅の齒を挽がごく。いく程もおく王子誕生ましまして母子安泰ゐりとまうを折から曚雲忽然と塔の下ゑ立り當下尚寧王ゐ曚雲を寶位のゐとりゑ召のゐして滿面ゑ笑を含み國師の神著空しからぜして王子誕生せり。ゑが兒恙おく生育べきや久後の吉凶を說ゐらしゆへ。と仰をれゞ曚雲これをうけぬゐり殿下御こゝろ安く思召れよ曩ゑも密ゑ棄せしごとく王子ゐ權若の後身ゑましませゞ聰明厳智世ゑ儕おく壽命ゐ天地とゝもゑ等しかるべし。はやく青宮を營みて世子ゑ立。二三歳ゑおりぬゐゞ速ゑ位を傳て万機の政をゐ

らしぬへ。おからべ邦家まもく〳〵泰平にして士民徳化に浴し道に遺たるを拾はず夜戸を鎖す堯風舜風五穀低垂して絶て賊民あるとおけん是併殿下有道の餘慶にあそとまうせしかべ王限りおく歓びて産育等閑おらず慈愛ぬふに利勇は腹心の家隷何がしが妻をおのが姪おり。といひこしらへて乳母に進らし。すべてわが方人の主に蔡飼を主らせしかば衆官是を疑ひ中婦君年の齢五十にちかく月来氣孕たる事もおねさて猛に王子を産ぬふこと。いと怪しとて竊に譏るものもあれど曚雲利勇が權威に怕れて明白にいいふよしもおく忠あるものはこれを歎充佞人はこまを祝して媚をその寵に求るも多おり。とかくもる程に。四五十日を經て産室ごもりの日子果母子既に肥立ぬひにけれべ尚寧王はまづ曚雲に吉日良辰を卜まし國中に大赦ま て北谷の阿公等すべて罪あるものを免し本日三司百官を龍宮城へ召集合て王子降誕の參賀を受海鮮野味烹調蒸炙此珍膳をつらねて酒食を賜ひ樂正楷下に候ゞて天孫歌太平調等の舞樂を奏もこの日東風平の按司陶松齋のみこゝち頻〳〵とて參らず寶位の右邊には中婦君鳳冠を藏さ霞帔を被て王子を嬭母に抱し水晶簾の裏にあり左のかたには曚雲國師。黄冠を戴き荷衣蕙帶して侍立せり。その餘國相利勇を首として法司紫巾官按司黄帽官親雲上里之子に至るまで官帽を正し袖をつらね斑行て三跪九叩頭の禮を行ひみな万歳とぞ祝しまうしける。かくて舞樂果しかべ尚寧王は利勇を近く召し卿等おべおべが兒の震器を稱賛もよりて今より東儲に立んと思へども彼生れていまだ百日を過ぬ才器をおゝに稱するもよしなきに似たり。おからべ百官その効きを侮り思ふて從ざるえのあらん歟。この事いかゞあるべきと問に利勇答まうすやう王子襁褓の中に在せども原是權者の後身おり且殿下の聖算既に六十にあまりぬへべ世子を立られん事遅しとせぞいまだ聞召れずや。近屬冨藏河の邊に假子集合て民謡をその謡ふ

神人来丐　冨藏木清　神人来丐　白沙化来

といへり。これ則王子降誕の前象おり。躊躇ぬふ事かは。と憚る氣色おくまうせしかべ王のさねて曩に是舊虬山の虬塚を穿起さんとせしとき都下の童子們童謡して。

惡神来丐　海潮不清　惡神来丐　白砂化蟹

とうたへり。おかして國師忽然と出現をこれ何のこゝろぞや。と問に利勇答るを得ず。曚雲その氣色を見て。うち微笑斑をきゝめてまうをやう殿下おどて曉りぬいざる裏に惡神来丐と謡ひしは王は御子ならざる寧王女をもて東儲としぬふ拭謂れり。かくて王

女を廢しぬふ」因て王子降誕ぬひぬ。されば神人来丐と稱贊す惡神とゐ殿下の御亂おらざる王女をいひ神人とゐ權者の後身」在を王子をまうすおり天」口なし人をもていゐ〜むるの常言空しからざる」ひゐをや。とおもたゞしく回答しかば利勇も去の〜。ぬかおり。と嘆賞す中婦君ハ。おのよしを聞て斜おらを歡び殿下おどて狐疑しぬふ。かゝる祥瑞あるものを誰かゐ否し侍るべ圸はやく立世子の事を議定めさしぬへかし。とをゝめけり嗚呼こゝ何等の妖言ぞや往時尚寧王忠臣の諫を聽を虬塚を發て不覺」惡魔を走らせ曙雲遂に國中」横行するをもて惡神来丐白砂化蟹とゐ童謠せり今亦神人来丐富藏氷清と童謠をるものゐ源爲朝王女を扶掖て小琉球より國頭の浦に着船し。久志金武の間切を經て富藏河をうち渉り遂に南風原」到ぬふ祥おるを尚寧王慮足らずおて兩おから曉得ぞ曙雲に說惑されてます〳〵歡び内官」仰て珠の箱をとり来らし。みづからこゝを捧ゐちて利勇」對ひ今日より王子を立て東儲とし相國をもて傅とを傳國の神寶琉球二顆の珠ゐ裹」寧王女がその一顆を失ひて今おほ完からぞといへども先規」まかして。おれを王子」附屬せん彼もの〜善惡孤おる迄ゐ後宮」養育しおかして後」中城の世子殿に移し居をべけこゝ相國且くこの珠を守て等閑」おせそ。

再按ぞるふ天祿ゐのたちゆのとくふおて全身大おるゐあり其形狀のべて說類卷之六十第十

と說おらし件の珠を遞與しぬへゝ利勇ゐ恭しく受おさめて三司百官」立世子の事を令おらはれゝ。みお万々歳と祝しまうしけり且して尚寧王ゐ又曙雲」對ひ國師年来國の爲」禍福吉凶を說示をよ一点違ふおとなし。わこおもふ」名あれば必形あり夫名あつて形おきものゐ禍と福とのこ國師の神術」因てその形を見るおとを得つべ圸歟。と微笑て問ぬへば曙雲回答て殿下禍福」形おしと宣へども名あるものゐ形あり。形あるものゐかおらぞ名あり譬ハ月日の悠遠」して。その小大を量かた圸をら名字あり日本」おゐ日を大日靈尊とし月を月讀命と稱又さゝらえ男と異名ゐ僧家」日を尊みて阿彌陀如来と号をるも。そのこゝろみおおおゝ亦日の姓ゐ張名ゐ表字ゐ長吏月の姓に文名ゐ申字ゐ子光と老子歷藏中經(潛確類書引レ之)」見えたり況禍福の形をや夫禍ゐその形牛ゐ如く身」肉甲ありて五色鮮明おり名づけて天鹿といふ(即天祿歟)王者の道備るときゐ出て天下」福をいたをといへり。(沈約宋書)又孟康が曰角一ッあるを天鹿とす兩角を辟邪とも蓋天鹿辟邪ゐ獅子の屬ニ揚用修おもへらく天鹿ゐ蝦蟇の大おるものゝ。とその謬こと甚し(潛確類書)近ごろ宋の哲宗の元祐年間化して道士とおりて市に遊び。みづから益壽聖人と稱ふ(風俗通)或ゐ宋の仁宗の時とを(古今纂要)

九張ヨつまびらかけれむ略す

宋の哲宗元祐元年日本の堀河院寛治二年ヨリ安元元年ニ至テ八十年以前ニ当ルヨリ四百年ヨリ近ころ

一名ハ福祿壽又南極老人と号し泰山老師と稱ふ。(五雜組)天竺ヨテハ吉祥天女と号く。一名ハ功德女人の爲ヨ猛利福德の應報ありといふ。その形画幅ヨ見えたり東方ヨハ形をいハず。その名を幸魂と稱たり。(日本紀)その名ハ異なれどもその物ハみな福をいふのみ亦禍ハその形牛ヨ似て頭ハ虎のごとし。おきを鬼門と号く往古黄帝神荼鬱壘をもてこれを捕て虎に餌しむといふ。(風俗通)唐の玄宗帝の開元年間窮鬼とおりて帝社夢に入りて。ミづから虚耗と名告り楊貴妃が繡香囊と上の玉笛を盗去らんとして鐘馗の神靈ヨ駈らる(事文類類引ニ逸志一曰云云)天竺にてハ黒晴天女又黒耳女と稱人間ヨ禍をもたらすを主るといふ相貌究て醜惡ニ(倶舎論又祖庭事苑ニクハシ)日本ヨハ亦形をいハず只その名を麻我通未の神と稱ふ麻我通未とハ禍神といふまれおゞ東方の古言ヨ禍を未我といへり。(日本紀)及惡叟を麻我許登と訓したり。(万葉)おれ則曲りて直からぬをおかいふとぞ。その名ハ迭ヨ異おきどもその物ハみな禍をいふなる抑禍ハ来しがたくして禍ハ招き易し。殿下まづいづれの形をこの齋もる仰社隨ヨこれを致すべしと綜精細ヨ應まうせしかば尚寧王おれを聞て、驚然と打笑ひ國師かくのごく博識微妙の神術あり。されその難きを後ヨして易きを先ヨせん速ヨ禍の形狀を見せいへと宣へば曇雲いと易き事ニと應つゝ口に呪文を唱へ印相して眼を閉おべしありて外面をさし招くヨ忽地筑登之們五七人怪き獸を鐵の鎖もて繫つゝ牽て庭上ヨ參きりさてまうすやう臣等目今御苑の中に干てかゝる獸を樸たり。そのざまいまだ見もおきぞ名をだヨおるものゝおくれへば直ヨ導覧ヨ備奉ること聞えおぐれば利勇仰を稟て獸を堦下ヨ牽居さし君臣齊しくこれを見るヨ形ハ牛ヨ似て頭ハ虎ヨ類せり當下尚寧王ハ曇雲を見かへりて國師。この獸ハ。ヨが國ヨ未曾有のもおこそ。その名をおらしへと仰れば曇雲うけなハりおれ則問しなへる禍なりとまうすヨ司百官こきを聞て駭然と驚き怪みおゝ初ヨ忌嫌ざるものおし王又曇雲ヨ對ひ國師の神術ヨ依て。されば目前ヨ禍の形狀を見るこを得たり。そもこの獸ヨ何の能かあると問なへば曇雲莞然として殿下彼常言を聞なへずや禍福に門なし只人の招く處ヨ来るといへり國君無道おきぞその國を滅さし。按司無道おれば。その城を喪ハし士庶人無道おれば。その身を保さらしむこれ此獸の能ありとまうすを尚寧王聞もあへず爪彈して。さてハ畜生くるものにあらずとく〳〵辜退よと仰れば曇雲つと身を起して冷笑ひ暗君みづから禍を招くこと久し彼いかでか退くべき中婦君荒淫ヨして後宮を濫り國相利勇權を弄ひて寧王

紅酒琉球の屬島大平山にて釀す酒なり色紅しとぞ

女を追討民間に赤子を奪ひとらして中婦君の産りと欺く。こゝをもて國民齒を切り按司黄帽悵を含む社多し既にそ社禍を來たしてこれを退るあとやゐあるといふその言語いまだ詫らずいと軟弱と見えたる怪獸奮然として怒れる形勢眠ゐ百煉の鏡に朱を沃るごとく牙ゐ千口の劒を逆に載たるごく一脊嗜りて忽地鎌を引斷離玉坐に閃りと跳あがりて尚寧王に飛かゝれゐ王ゐ愕然と駭ち怕れ撲地と仆れて綷切ねひぬ中婦君ゐこの形勢に且驚き且怕れ身を轉して逃んとをるを禍獸ゐ脫しもやらず直に向臑を折かゝ仰さまに踏にじりていとゑろやかゐる右の足をおのが前足もて楚と踏ほえ。左の足首に牙を立てめり〳〵と引裂ほどに中婦君ゐ叫喜と叫びも果ぞ皮破れ肉開けて二足の紅絹を引に似たり傍にありける乳母妳母等ゐ魂更に身にそゐで王子を横さまにかき抱ちつゝ走り避んとをるに足さへ感たるやうにて得も立ぞ是欲臂の肉を咬とられて鮮血さと流れ出平山に紅酒を釀し又是後宮に細腰を羨む蜘蛛飢て螺螺に似こり利勇ゐおれを見て吐嗟とばかり忙しく王子をかゆとり渡殿を跳ゑえで辛ゞて逃んとするに禍獸ゐまず〳〵狂ひて欄干を突毀り飛鳥のごく追ひ逼りて裳を丁と齧留まゞ利勇ゐ夢うつゝの境ともさきまへず見かへりおがら禍獸の額をのぞみて手に持たる珠を撲地と投つくれゞ明珠の德にや怕ぢ恐んさすがの猛獸軟々として耳をたゞせ頭を低ゝ逡巡そその間に利勇ゐ王子を懷にれ〳〵入まて嗤々脫れ出歡會門のあたに繫ざたる馬に閃りとうち跨南風原を投て逃去りぬかゝりし程に三司諸按司親雲上里之子筑登之等面色みを土の如くおりて逃んとほるに手足癱麻て露ゞかりも動き得ず戰慄てせんすべおく國師願くゐ救ひねへ救ひねへと叫びーかゞ曚雲ゐ裳を裾りて寶位に無素と推上り長く黄たる髯を握拊て高やかにうち笑ひ時おるかおゝ。尚寧王暗愚にして政叉道に稱ず天孫氏二十五代一万七千八百二年の正統こゝに斷絶す衆人おどて曉らざる淫婦中婦君齡半百にして子を産んや利勇が懷に去て脫去たる嬰兒ゐ彼等密に民間に募めその母を殺して其子を奪ひ王を欺きて王子と稱をるものおり唐山の往古ゐ德あるに人に譲て天が下を治むるが德よ祐しく天孫子に代るべし汝等これに從ゐ生き敢かは立地に死ん。のくてもおほ惑ひて禍を怕れずや將暗死を出て明きに從ひともに歡樂して福祐子孫に傳んやとく〳〵回答せよといふ衆皆これを聞て首を叩ち神仙道德高くして天に大業を受ねへり誰かその臣たる事を願ゐざらん臣等柱石の才なしとゆへども犬馬の勞を竭しひおん速に位に即ねへかしと阿

諌ひ。一人おそる〳〵身を起して。利勇が投捨たる俾國の明珠を取て進らすれば曙雲大きに歡びて。件の惡獸をさし招くに禍獸は尾を掉て押たるごとく。曙雲がほとり近く來て。忽地一顆の珠を吐た。曙雲是を見て。驚死たるおもゝちしこは疑ふべきもあらぬ曩に寧王女の失ひたる珠。これ今位に即に及びて。琉と球と二顆の珠陰陽全く聚ると天この祥瑞を降すに似たり。卿等今ゝ推尊びて。われを曙雲法君とまうせよ。とほゝりかに告ゝら〳〵二顆の珠を玻璃の皿に盛おらべて。衆人に指示せば。みな万歳とぞ唱ける。この條の事は。そべて曙雲が幻術にて當初一顆の珠を盗みとり。今おの獸に吐して。衆人を惑をこけり。のくて曙雲は群臣の慶賀を受て。王と中婦君の亡骸を薄く葬らしさていふやう。利勇今偽王子を輔佐して。南風原の城に籠るとも怕るゝに足らず。只悔がたきは東風平の按司陶松壽のみ。件の松壽は原來毛國鼎が腹心のものにて。密に顧夫人の妹おる命婦。真鶴と夫婦の契約をはたし。偽りて利勇に佞媚び。貳おきもせと思はし。中城の討手をうゝねりて。査國吉と謀りあはし。王女と夫人を救んとするに。事急にして。顧夫人遂に自殺せしのち。その首をもて利勇を忻り。一方の圍をとかして。後ぞそく王女を落さんと計校しが。利勇はおほ兵を退けず。さるからに。真鶴が死首を刎て王女の身がはりとし。實おき功に因て。按司に拜任せられしものゝ。これおの千里眼をもて。よくその事をおるといへども。思ふ旨あれば。おれを咎ぞおらず。顔にてありけるゝ。されば利勇は。己が位に即たるよしを聞んに。松壽をもて軍師とし。幼主を挾て。軍兵を聚め。日おらず首里を攻とらんと議すべし。おかまども。松壽は真實に利勇に伏從そるにあらねば。彼が爲に心力を竭そに到らで。事遠には成べからず。よしや松壽が些の軍兵を將て推よするとも。何程の事やはある。そは餘北谷の阿公が徒みお是火に向ふ乞丐のごし。たゝて心肝の病ひにあらず。只忽におがたきは寧王女の。今武勇勝れたる筑登之。五十人をもて討手とし。猛獸をもて巽とせん。この禍獸がゆくかたは向はゝ王女の隱家をおるべきぞ。とくとくといそがしたつれは。筑登之等命を稟て。戈具し。劍を帯戟を横へ。禍獸を先に歩して。忙しく走去けり。さる程に國相利勇は偽王子をかき抱き馬にうち跨て。おのが采地おりける南風原の城へ逃かへり。俄頃に籠城の準備をおんおたりける。この日東風平の陶松壽は立世子の沙汰こゝろを得がたけきに病に假托て。首里に參らず。おかるに。その日申の北及に南風原より利勇が騎馬の使者來て。王と中婦君のおくおりゐひぬるよしを告おらし。おれを招くとふたゝび三遍に及しかば。松壽は大に驚死て。手勢四五十人を將て南

風原に赴きその夜利勇等に會合しまづ間者を首里へ遣して綷の爲体を張るにそのもの翌朝走りかへりて曙雲位を簒て中山法君と稱るといへども幻術に怕れ惑ひて。三司諸按司枝を討んともせずばや悉屬從ひていと告しかば利勇は只呆れ果てせんをべを知らぎさりともと思ひかへして中山山南山北の諸按司へ雞毛の檄文を走て速に幾兵を起し逆賊曙雲を討滅し王子を首里へかへし入れ位に即進らせんよしを諜るに或は利勇が累年の奸惡を憎み或は禍獸の爲に族滅せられんかと怖みてはかくしくその募に應ずるものおく大里真和志佐敷玉城知念具志頭麻文仁喜屋武真壁豊城小禄をべて十一箇間切の軍兵おみおぶくを催促に隨ひて出来れりよりて利勇は松壽をもて軍師とし阿公を偽王子の傅とし溝を深くし塀を固くし只かの禍獸を防ぐの外はないだしたる変もあらぎ松壽も又おもふ所あれば志をこゝに致さず只いたづら日を過すほどに利勇は頻に焦燥て間切毎に牌をうたしつ曙雲を滅すべき勇士も欲得とて募け利。

第四十五回

偽王子を挾て利勇軍兵を聚む
赤瀬碑に苦て王女爲朝に逢ふ

寧王女はいぬる九月二日に曉昏に越来おる石橋のほとりにて惡少年が爲に既に擊れぬひぬと見えたるにはからぎも白縫姫の靈魂に助られ必死に脫れて恩納嶽にはけ入りその曉がたにゆくりおく投牌金査國吉が中城にて利勇が夥兵を砍ちらし辛ゞてこの山中へ走り躲んとをるに環會ぬひにけれべ主從迭に歎ぶ事限りおく王女は羸夫人の安否直鶴が忠死の事をいひ出てうち泣ぬへべ査國吉は又鶴亀母子が事を告まゐらせ又まうはべう某こゝへ来つる途にて路人のうち語ふを聞くに羸夫人はさのふ擊れぬへりとなんその事實言なりせべいと痛おくおそとまうをを王女は聞もあへぎ。涙は只驟雨の降そゝぐ如く轉輾てぞ泣ぬふこは此とき白縫の靈魂は王女の身にそはでありけん聲ざまおども日来にかはりぬはず査國吉はさま〳〵にいひ慰めまゐらをるに獵者めきたる夫婦のものとおぼしきが忽然と出来りて王女のほとりに蹲踞しこの山は琉球第一の高峯にて人もかよはず世を潛ひぬふ爲によけれど毒蛇猛獸の悪ひおきにもあらぎお社れら夫婦は讀谷山の石とりに住居をる山幸おり。おおゞくはわが家にわたらせぬへ心の及ん程は舍藏奉るべしといふかくまでにがうへをおりて忠心もて誘引おるに隱さべおかゝにあーかりおん。とおぼせしかば王女はそと査國吉

に注目しぬふに査國吉そのおいろを得て件の夫婦に對ひ汝等が推量のごとくこゝに坐をおそ寧王女にておいするおれ繼母中婦君嬖臣利勇曚雲等が爲におん身のおき處おくおらしぬへども一旦雲開けて天日を見ぬふ時しおゝらんやともかくもして舍藏進らせよ世に出ぬゝ恩賞に乞によるべしと說示をに夫婦歡びておのが裝笠を脫て主從に被せ進らせ鄉導して讀谷山の白屋に立かへりいと貧しくゝ世を徑營めど心べかりゝ信々しく飯おど炊て款待けり志かるにその夜より査國吉が手痍いたみ出て遂に被傷風におりけるが十月の中旬に到りてやゝ痍ゝ半愈たりさて獵者夫婦ゝ毎日に山に入りて夫ゝ獸を獵くらし妻ゝ薪を樵り或ゝ磯におりたちて海藻を拾ひて活業とし閑有一日件の夫婦いそがゝしく走りかへりて寧王女主從にまうをやう。いまだ首里の形勢を聞し召れずやおゝする此度中婦君のおん腹に出來させぬへる王子ゝ世子に立んとて。況のゝ龍宮城に三司官諸按司を召集合ぬふ折から曚雲例の幻術もて禍獸と呼びおす怪獸して王と中婦君を焚ひ殺さしおのれ寶位におし登りて。こづから法君と稱し忍地三省の地を幷呑を國相利勇ゝ辛ゝて王子をかゝ抱き南風原に逃かへりて松壽阿公等とゝゝに事を議し彼是に屬託して軍兵を招きよし曚雲をうち滅して王子を位に即奉らんと謀れども賢況も愚おるもみお被禍獸に怕害てその募に應ぜぬ利勇ゝいよゝをべおきに間切毎に牌をうたしておさ〳〵勇士を募るとぞ傳國の寶珠も失たる一顆さへ曚雲が手に落て靡況從ざるもの稀ゝさるによつて曚雲ゝ筑登之五十人に分付して彼禍獸を率ゝ王女をうゝおひ奉らん爲にまや麓に追ひ到せたり其夫婦力を竭して志ゝが程ゝ禦ぎ留べけれどおゝに在さん事ゝいとも危しとく〳〵この山を西へくだりて海邊へ走去ぬへ。おのづから虎口を脫れぬふ幸あるべしとまうしもあへぬ亦外面へ走り出づ王女ゝ父王の嶢りぬへるよしを聞も果ずおゝそもいかに。とばかりに膝を惜ずよゝと泣悲傷に胸うち塞りて阿と叫びつゝ倒ぬへゝ査國吉慌忙きて扶起し慰んとすれゝにも又遺恨の涙とゞめあへぬ。やうやくに思ひかへして。さまく〳〵いひ勵しとく〳〵落ぬへと勸めまうすに王女ゝいよゝふし沈て立もあがりぬゝぬ。こが身王女と生れおがら不孝にして艱苦に堪ず。いけミ殺しみ形おき世に存命るゝ何の爲ぞ罪おきよしをいひとゝて。御免かうぶりてんと思へばん。おかるに母ゝ枉寃に擊れ父王さへ禍獸に。おん身を忍かされぬふと聞て。いかで命を惜むきべ愁に顯身の息あれゝこそ物をもおもへ。曚雲が賊兵をおゝにまつまでしもあらず刃に伏て

われ死ん脫去るあとかゝと宣ゐをれば。査國吉膝をふり立こゝいひがひおれ御形勢か
ゐ逆賊曚雲を討亡し國中を拂清めゐひておそ孝ともまうさめ。日本はいよ〳〵を開く
ゴ仲哀天皇の后氣長足姫尊（神功皇后）ゐミづから夥の軍兵を將て三韓をきへ討從
へたまへり。男兒おらでゐ寇を得討ぬもの歟いと朽をしと諫勵し遂ゴ王女を扶掖て。
颯者の家を走り出さるゴてもあるゴ夫婦ゐいかあるものゝ世を避たるゴてかくまで
志の信やかおりし今の時ゴ當てゐ大臣按司も阿容々々と曚雲ゴ屬從ふと聞くもの
をそれらゴもら立まさりさる心操こそ有難けれと頻ゴ賞嘆あたりしかば王女も打點
頭ゐひて。われもおか思ふおり彼等寇を禦ぐとて走り去たるが擊れやあたると主從齊
しく出にしおこを見かへれば今まてありつる獺者が韓屋ゐのき消すやうゴ見えずお
りてふりたる一木の松のみ立り主從ゐこの形勢ゴあやしき事限りおく原來件のもの
どもゐ山祇おどゴてあらんもらんおの日來それが住家ゴとして起臥せしゐ彼處おる。
壽松の横蔭ゴてありけりとはじめて曉得てもろともゴあやしそおたを伏拜み又山路
を西へ下りて浦曲を望て走りゐふ浩處ゴ喇叭噴吶銅鑼鼓の音海山ゴ響ゴたりて囂し
く寧王女を脫しなせそと罵りつゝ曚雲が賊兵四五十人手ゴ〳〵器械を引提て追蒐來

つ怪き獸を真先ゴ駈立て既ゴ事急なりしかば査國吉倍と見かへりて其おゝゴ命を
捨ずゐ王女ゐ立地ゴ惡獸の牙ゴかけらまゐふべからんとく〳〵走りゐへかしまう
しも果ぞ劒を拔驚して件の獸ゴ立逆へば禍獸ゐ大ゴ哮り衝と走り來て矢庭ゴかけ倒
さんと跳かゝるを查國吉ゐはやく身を反りてこれを避ニたび三遍その後方ゐ立繞り
て劒を閃しつゝ刺んとずるゴ怪しき犯哉查國吉が劍ゐ三段四段ゴ折飛て半愈たる金
瘡口さへ一度ゴ裂て鮮血流れ瞑眩て跌く處を禍獸ゐ牙を張り查國吉が勝口を太股の
辺て咬ひ着一揮ふつて振たゝさんとをるゴ查國吉ゐおほたふれず惡獸の頭を抱さと
めて捻挫んと豆ゴ嚔く脇五臟を絞るがどし當下賊兵等走り來て戟をとりのべ查國吉
が膂を左右より刺ほどゴ憐むべし南家臣傾死て紅粧をちらし遂に魂散魄去りて黄泉
へ流れゆく勇士の最期ぞめさまし犯その間ゴ寧王女ゐ惜からぬ身も查國吉ゐ忠
死を化ゴせじと思ひかへし道五七町落延てやゝ海邊ゴ到りゐふゴむからそも肥兒郭
とおぼしき少年忙しく獨木舟をさしよせて王女を扶乘し進らせ艪を推櫂を操りな
つ櫓き出をゴ舟の快おと天飛ふ鳥のどく瞬間ゐ洋中ゐと遥ゴそおりゴけるさるほ
どゴ曚雲が賊兵等喘々追ひ來たつて。いたつらゴ拳を捺りその舟かへせと呼かくれど。

浪の音のみ回答して船は漸々に迹なくおりつ禍獸もその遥かなるを見て涙路を渉して追んともせざりしかば王女は不思議に虎口を脫れて少年等に對ひそも汝たちは何人の兒にて己が危きを救ひたる名告あらしいへと宣へば二人の少年は艤械をとりおがら跪ひてまうもやう某等兄弟は中城の按司毛國鼎が子どもにて兄が名は鶴弟は亀と呼れし父國鼎が討れたる日親族査國吉が情にて母を扶て辛〳〵て脫れ去越來の山中に忍かくれひて兩三日を過しいひしが其處にも留りがたく産月おれば道はかゆかぬ母を轎に扶乘し同肥と邑を拜別し大宜味羽地の果までもと落ゆく折から金武よりは西おりける曠野を過るとき母新垣は俄頃に産の氣つきていかにもすべなく轎を輪をかきおろして兄は藥を買もて來んとて富藏川社上に赴き弟は兄を追ひ留んとて同肥はばし母の傍を離れ一間にいと怪しき老女の爲に母親を殺され胎内の兒さへ殺老婆が奪ひ去たりとおぼしき所に哀傷のやるかたなきいへむさらおり仇は往方知に認ざりし遺恨は北んぬうもあらぬ。かくて詰朝母の亡骸を水葬せんとて富藏川の上に赴き父毛國鼎が亡魂に誘引れおの海邊に迷ひ來ていにその夜の夢に父がいうやう汝等且くこゝに留りて寧王女を救ひ奉り小船に乘り進らせて小琉球へ漕渡り島

北おる赤瀬の碑のほとりに潛せ奉る彼赤瀬の碑は國祖天孫氏の立ねへるものおりて。これ最に王命を奉て彼處に到り幣帛たてまつりてその靈驗灼然おるよしは面りに見たり。王女辛〳〵て其處に赴き彼碑に禱ねは遂に禍をかへして福にあひなふべし。この浦に獨木船の漂ひ著とあらば。これ王女の來ねはん事遠からずとおもへ王女のおん容止は如此々々にて箇樣々々おる衣服を被ねへりとていと精細に說あらせしが兄が見るも弟が見たるもそは夢は一点違はずかくてぞ兄弟この處にありて毎日に海上を眺くらして船の流れよる筏まつ程に今朝しもこの船忽然として岸に著ければ。さては王女の來ますん事遠からずと歡びてこゝろに密にまち奉りていひしが果して同肥が志をいたを幸を得たりとて涙さしぐむつゝ回答まうせしかば王女はこの物語を聞て頻に感賞し忠おるかを毛按司その身枉冤に討れてその靈なほ主を救ふ將汝等が孝心世に儒稀おり嗚乎おの父にしてこの子あり亦憐むべし此は新垣が横死おり世にも人にも捨られしわがうへは層おらぬ富貴三省を有ねふ父王をら禍を脫ねはねで妖賊に位を簒れ獸の牙にかけられて墓おく斃ねひぬる過世あやしき命運おり抑わが身。中城の世子殿を脫れ去しより廟夫人真鶴查國吉等恩に荅て命を隕せしとゞめをいへ

べ如此々々あり終に菌様々々なりとて讀谷山なる獵者夫婦が誠心まで。おちもなく說
ちらし。れん目を拭ひたゝ又宣ふやう讀谷山の獵者夫婦に。もし汝等が亡父母の假に形
をあらはして。われに宿かしたるまやあらぬや。死しての後も主を救ひ子を思ふ事のか
くまでまに有けるもの歟。と船筌まに韓輟つゝ唧ねへべ鶴亀におぼうら悲しく坐に涙さし
ぐみけり。さて讀谷山下の海邊より水行三日ならでに小琉球へ到がたれまこの船の走
ること射る矢よりも速なれど水の上穩にして。その曉がたまに小琉球社島北に著ぬか
くて主從三人岸まにのおりて彼此を見かへるまに七ツの間切。二百余の村あり。と聞しまに
似ず島の中なる邊土にて里も遠く人もかよはぬ汀まに太やかなる蘆のみ生茂りて。浦
風まに職ぎ左右に入江にして。路只一條なり汀をはなるゝ丈十歩可まして赤瀬の碑あり
なり高さに二三丈もあるらんと見えて。その形圓なる柱のごく碑の面にひとりの美
人を勒なしたるが。その面貌さなから生るがごし。この國開闢しと元天孫氏の建ねへり
と世々まいひもて傳るも字べなりそのの景迹實まに人作まにあらず碑の周まに蘭といふ
草磯馴松の外にに歷もなく上久たる支いひも竭しかたし王女にあゝまに采ねへるそのの
朝より瓜折なて彼碑まに禱ねふ程まに鶴亀に海藍を拾ひ木の子草の實を摘とて王女に

勸め進らし同肥もうち食ひて主從やうやくまに餓を凌き日暮べ松蔭まに身を倚て臥と
もあらで夜をあかしたゝ。一日二日と過しねふに第三日まに至りて水鳥夥物まに駭きたる
がごく。こなゝをさして飛來たりしかば王女にあれをうち瞻て眉を顰鶴亀まに宣ふやう。
船もかよはず里も遠きかゝる入江まに棲む鳥の慌しく群だたゝと。いと〳〵怪しはや曚雲
が賊兵等。こゝに追ひ逼りぬとおやゆるにと宣ふその言いまゞ訖らぬ。四五十人の賊兵。
島酋長まに鄉導さして。暴直まにおしよせ來つ犇々ととり圍て王女を生拘らんと闘くまぞ。
主從に吏急まにして舊の船に乘も得ぬ今に脫かたしと覺期しつ鶴亀にかひ〳〵しくも
すむ敵をかけ隔刀をうちふりて防ぎ戰ふ程まに少年と思ひ侮り欲たふさるゝもの五六
人まに及べりさまべとて同肥か。十五まだに足らざる小腕まにて目まにあまる賊兵を防ぎ留
べたやうもなく終に力衰へ勢ひ疲て兄も弟も生拘らる賊兵等にまは〳〵勇みて既まに
王女を捕捕んとまるまに王女に忽地氣色かにりて近よる敵を左右りへ撲地と投退起し
も立ず劍を拔て。ぱらりずんと欲たふし勢ひ猛く立ねふ賊兵等に。これを見て大まに驚紀。
されべおそ聞しに違にねに王女まに神の憑て狂するぞ。とく禍獸をもて齧たふさせよと
異口同音まに叫ぶ程に。をと應つゝ後陣より彼惡獸を放かけ鼓を鳴らし鬨の聲を揚人と

獸と力を戮して又むら〳〵と蹴ひ蹴るを寧王女は物ともせず劍をとり直して彼禍獸を刺んとするに刃は鍔際より戛と折れて鞘のみ主の手に殘りつ今はかうとおぼせしかば後さまに閃りと飛て赤瀬の碑の脊に驟れ。これを盾として一息吻とつかしもあへず禍獸はまを〳〵哮狂ひて矢庭に追ひ逼りつゝ石の面に彫たりし美人を王女とや見たりけん突然として齧みつけゞその碑俯しに倒れかゝり天地も崩るゝばかりの音してさしも猛き怪獸を半身土中へ打伏たりされば頭を碎れ肩腰を折かしもろともに石に打れ。ひらめきおりて死ぬる賊兵少からず奇おはかな赤瀬の碑は天孫氏これを建て。一万七千八百二年の今に至るまで暴風暴雨にも朽ず傾す搖ぬ石もおのづから倒れかゝりて禍獸を壓鎮るこそ不可思議なれ。さは世は澆季に及ぶといへども祖神の威德おそ此石にやとゞまりけん禍獸は反起んとて蠢きしがあべしこそありけれ口より泡を吐こと千尋の綠を繰出すがごとく泡の消るに隨ひて獸の形土中に滅盡やがてぞ見えずおりにけり。先陣夥石に打れて遂に禍獸きへ矢たれば後陣も共に辭易して左右おくれ擊もかゝらぎさきはとて王女を擊もちさば後難脫れがたおとや思ひけん。あれ生拘れと罵りあひて。三十餘人鉾を揃へ嚔き叫て擊てかゝるに王女は石の倒るゝとき土

ぼきのかたに袂を布れて進退自在おらぎ劍さへ折れたれば天を仰て嘆息し手を束て死につ死ぬふ折から誰とはあらず汀に茂き蘆の中より箭を射出す事蟲の飛ぶがごとく一箭に二三人を射仆す程に鏑の鳴響く隨に命を隕す賊兵十八九人に及びしかべこれはそもいかに。と駭き怕れ二人の少年を生拘とれば軍おこるかひはあれ怪けおる王女を生拘らんとて可惜命おうしおひそと散動て鶴亀を將て。これ先に。と立足もなくみな逃去りぬ。當下枯蘆の穗をなびこさ〳〵として舩を水際に槽よせつゝ身の丈七尺射の目猿の臂威風凜然たる壯士年の齡は三十七八おるらん。とおぼしきが腰卷に小手脛當して黃金作の太刀を佩被たる蓑笠搔遣捨て弓杖投かけ閃りと飛て舩をはあれ岸にのぼり王女のほとりに歩みよる。あれは是いかおる人ぞ清和天皇七世の皇孫鎮守府將軍陸奥守源義家朝臣の嫡孫六條判官爲義の八男鎮西八郎爲朝おり王女は目はやくこれを見て。あお御曹司。と呼びらくる聲さまは又白縫に露はかりも異おらず。われにもあらで忙しく走よらんとすれば石の下に布ぢし袂も拂と斷離るゝ契りはふかき吾妹子に聲は似たれど面影は。こが妻ならぬ他し人に夫と呼るゝも不審く爲朝はあべしうち覩りて。いふべきこともおかりけり抑爲朝いぬる八月十六日風濤の難に係り舩破

れて妻子沈淪し。その身讃岐院の冥助によりて。脫れがた死を脫れ。こゝに來のへるまでの物がたりは拾遺篇の首に說起をを讀得てあらん。

椿說弓張月續編卷之六畢